

内閣府青年国際交流事業報告書2021

令和3年度 「東南アジア青年の船」青年会議



内閣府青年国際交流事業報告書2021

令和3年度

「東南アジア青年の船」青年会議



内閣府

序

内閣府では、日本と諸外国の青年の交流により、青年相互の友好と理解を促進するとともに、青年の国際的視野を広げ、次代を担うにふさわしい国際性を備えた健全な青年を育成することを目的として各種の青年国際交流事業を実施してまいりました。

その中でも、「東南アジア青年の船」事業は、昭和49年(1974年)に我が国とASEAN加盟国との共同事業として発足したもので、船内や訪問国で生活を共にしながら、討論、ホームステイ、地元青年との交流等様々な活動を通じて、日本及びASEAN諸国の青年相互の友好と相互理解を深めるとともに、国際的視野を広げ、国際化が進展する社会の各分野でリーダーシップを発揮することができる青年を育成することを目的としています。

本事業は元々、参加青年が対面でディスカッションやセミナー等の研修を行うものですが、今年度はコロナ禍を巡る状況がいまだに予断を許さないことから、昨年度に引き続き、オンラインによる「東南アジア青年の船」青年会議を開催することといたしました。初めてのオンライン交流となった昨年度の経験を活かしつつ、本会議では、社会の指導的地位で活躍するファシリテーターを交えて参加青年によるディスカッションを行い、また、新たに「自由なテーマで参加青年自らが企画し議論する場」を取り入れ、「東南アジア青年の船」を疑似体験できるプログラムを計5回にわたってオンラインで開催し、日本及びASEAN10か国の青年に参加いただきました。

本会議を通じ、参加青年には世界的な社会問題について大いに議論いただいたことで、国際交流の入り口に立ったことを実感し、この先の活動につながる学びを得たことと思います。今後も、様々な形で継続した交流を行い、更なる友好を深めることにより、東南アジア地域における次世代のグローバルリーダーを担い活躍されることを願ってやみません。

内閣府としても、これまでの交流事業の経験や実績を踏まえて、今後の「東南アジア青年の船」事業の更なる充実につなげていきたいと思っております。

本報告書は、今回のオンライン交流で行った様々な活動について記録したものです。この報告書を通じ、「東南アジア青年の船」事業についての理解を深めるとともに、国際交流への関心を高め、今後の一層の御支援をいただければ幸いです。

最後に、本事業の実施に当たって御協力いただいた参加各国の政府をはじめ、関係各位に、心から御礼申し上げます。

令和4年3月
内閣府青年国際交流担当室長
黒瀬 敏文

内閣府青年国際交流事業報告書2021
令和3年度「東南アジア青年の船」青年会議

C O N T E N T S

序	3
カラーグラビア	5
第1章 事業の概要	9
1. 趣旨	9
2. 日程	9
3. 参加青年 (PY)	10
4. ファシリテーター会議	10
第2章 「東南アジア青年の船」青年会議	12
1. 日程	12
2. 内閣府特命担当大臣挨拶	13
3. 基調講演	13
第3章 ディスカッション・各グループのレポート	18
1. あらゆる人の活躍グループ	18
2. 貧困、水・食糧へのアクセスグループ	20
3. 働き方と経済成長グループ	21
4. 教育グループ	23
5. 強靱なまちづくりグループ	25
6. 健康とウェルビーインググループ	27
7. 森林環境及び生物多様性グループ	29
8. 海洋環境グループ	31
9. 持続可能なエネルギーの利用グループ	33
第4章 ピア・ラーニングセッション	36
1. ピア・ラーニングセッション概要	36
2. ピア・ラーニングセッション一覧	37
第5章 参加青年による事業評価	43
1. 事業全体	43
2. 基調講演	45
3. グループ・ディスカッション	46
4. ピア・ラーニングセッション	47
関係資料	48
1. 参加者名簿	48
2. 参加青年の構成	57

第1章 事業の概要

1 趣 旨

(1) 事業目的

令和3年度「東南アジア青年の船」青年会議は、「東南アジア青年の船」事業（以下「SSEAYP」という。）が新型コロナウイルス感染症の感染拡大により実施できない状況においても、日本国と東南アジア諸国連合（以下「ASEAN」という。）10か国の青年交流を絶え間なく継続させるため、実施する。本会議は、ASEAN10か国及び我が国の青年が、オンラインを活用した交流活動等を行うことにより、青年相互の友好と理解の促進、青年の国際的視野の拡大、国際協調精神のかん養及び国際協力における実践力の向上を図り、もって国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮することができる次世代リーダーを育成することを目的とする。

(2) 事業内容

本会議はオンライン方式で実施することとし、これまで実施してきたSSEAYPの特徴を生かしながら、ディスカッション活動を中心として、参加青年が自主的に企画・運営するピア・ラーニングセッション等のプログラムを実施する。

ディスカッション活動は、「SDGs達成に向けた青年のエンゲージメント：変化への航路」をテーマとし、SDGs（持続可能な開発目標）の17のゴール（目標）達成のため、世界が抱える社会課題への理解を深め、青年として何ができるか、どう行動に移すべきか、9つの分野（①あらゆる人の活躍、②貧困、水・食糧へのアクセス、③働き方と経済成長、④教育、⑤強靱なまちづくり、⑥健康とウェルビーイング、⑦森林環境及び生物多様性、⑧海洋環境、⑨持続可能なエネルギーの利用）ごとにディスカッションを行う。この9つのグループは、それぞれの専門家でもあるファシリテーターによって運営される。

2 日 程

事項	日程
関係各国連絡会議	令和3年6月22日（火）
日本参加青年選考試験	令和3年8月22日（日）及び29日（日）
ファシリテーター会議	令和3年10月6日（水）、11月17日（水）、28日（日）、12月5日（日）、12日（日）、19日（日）
日本参加青年事前研修	令和3年11月7日（日）
「東南アジア青年の船」青年会議	令和3年11月28日（日）、12月5日（日）、12日（日）、19日（日）、令和4年1月9日（日）
日本参加青年事後研修	令和4年1月23日（日）

3 参加青年 (PY)

参加青年 (PY) は、次の資格要件を備える応募者の中から、各国政府が選考する。

(1) 人数

- 9 分野各国各 3 名程度 (1 か国全 27 名程度)
- 11 か国合計 300 名程度

(2) 資格要件

- a. 令和 3 年 4 月 1 日現在、おおむね 18 歳以上 30 歳以下の者

- b. ASEAN 各国と日本との青年交流に対する関心がある者
- c. ディスカッション活動を円滑に行うことができる英語力を有する者
- d. 過去 SSEAYP に参加したことがない者
- ※ 本会議参加者も、来年度以降の SSEAYP に参加可。
- ※ 令和 2 年度「東南アジア青年の船」未来会議に参加した者の応募は可能だが、選考は新規応募者を優先する。

4 ファシリテーター会議

本会議におけるディスカッションの目的などについて、ファシリテーターに共通認識をもってもらうとともに、その運営方法等について協議、情報交換等を行うことにより、ディスカッションの円滑かつ効果的な実施に資するため、ファシリテーター 9 名とオンラインにて、「東南アジア青年の船」青年会議ファシリテーター会議を開催した。

【ファシリテーター会議協議事項】

第 1 回 (令和 3 年 10 月 6 日 (水))

- (1) 令和 3 年度「東南アジア青年の船」青年会議概要と日程
- (2) 各分野に係る基礎情報についてのファシリテーターからの提案及び意見交換
- (3) 成果報告会の進め方
- (4) PY への事前課題

第 2 回 (令和 3 年 11 月 17 日 (水))

- (1) ファシリテーターから準備状況共有
- (2) ゲストスピーカー講義 (ディスカッション・グループ (DG) 別) について

第 3 回 (令和 3 年 11 月 28 日 (日))

- (1) グループ・ディスカッション I の振り返り
- (2) ピア・ラーニングセッションについて

第 4 回 (令和 3 年 12 月 5 日 (日))

- (1) グループ・ディスカッション II の振り返り
- (2) 成果報告会に向けた準備

第 5 回 (令和 3 年 12 月 12 日 (日))

- (1) グループ・ディスカッション III の振り返り
- (2) 成果報告会に向けた準備

第 6 回 (令和 3 年 12 月 19 日 (日))

- (1) グループ・ディスカッション IV の振り返り
- (2) 自己評価 (DG 別) について



第 1 回ファシリテーター会議 (令和 3 年 10 月 6 日)

【ファシリテーター名簿】

	ディスカッション・トピック	氏名	性別	国名
1	あらゆる人の活躍	Martin Polaine	男	英国
2	貧困、水・食糧へのアクセス	Rahmat Hidayat HM	男	インドネシア
3	働き方と経済成長	Dini Hajarrahmah	女	インドネシア
4	教育	Somkiat Kamolpun	男	タイ
5	強靱なまちづくり	Pannaritsara Chuenjitrabhramon	女	タイ
6	健康とウェルビーイング	Carmela D. Barcelona	女	フィリピン
7	森林環境及び生物多様性	Vivien How	女	マレーシア
8	海洋環境	Nutcha Charoenboon	女	タイ
9	持続可能なエネルギーの利用	Sitta Marattanachai	女	タイ

第2章 「東南アジア青年の船」青年会議

1 日程

月日	時間 (日本時間)	活動内容
2021年 11月28日 (日)	14:00-14:45	開会式 ・ 若宮健嗣内閣府特命担当大臣挨拶 ・ 内閣府担当者、一般財団法人青少年国際交流推進センター担当者紹介 ・ 各国PY紹介 ・ ファシリテーター紹介 ・ 令和3年度「東南アジア青年の船」青年会議説明 ・ ピア・ラーニングセッション紹介
	14:45-15:45	基調講演 講演者：辰野まどか（第28回SSEAYP日本PY、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事）
	16:00-18:00	グループ・ディスカッションI (DG別)
2021年 12月5日 (日)	14:00-15:15	ピア・ラーニングセッションI
	15:30-18:00	グループ・ディスカッションII (DG別)
2021年 12月12日 (日)	14:00-15:15	ピア・ラーニングセッションII
	15:30-18:00	グループ・ディスカッションIII (DG別)
2021年 12月19日 (日)	14:00-15:15	ピア・ラーニングセッションIII
	15:30-18:00	グループ・ディスカッションIV (DG別)
2022年 1月9日 (日)	13:30-14:00	各国紹介動画上映
	14:00-16:45	成果報告会・閉会式 ・ 成果報告 (DG別) ・ 吉田大内閣府青年国際交流担当室参事官補佐（青年交流第3担当）挨拶
	17:00-18:00	自己評価 (DG別)

注：グループ・ディスカッションI, II, III, IV (DG別) のいずれかに、ゲストスピーカー講義 (DG別) が含まれる。

2 内閣府特命担当大臣挨拶

若宮健嗣内閣府特命担当大臣

令和3年度「東南アジア青年の船」青年会議の開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

「東南アジア青年の船」事業は、日本とASEAN諸国との共同事業として40年以上の長きにわたり継続してきた歴史ある事業です。これからも各国の相互理解と友好の促進が重要であるとともに、各分野をリードする人材の育成が各国の発展に不可欠であると考えております。

私自身も一昨年は外務副大臣としてラオスを訪問するなど、これまで度々ASEANの国々と関わることで、日・ASEANの関係構築に尽力してまいりました。

本日、このような場に、熱意ある青年の皆様が参加され、開会を迎えることができ、私としても喜ばしい限りです。

コロナ禍を巡る状況は明るい兆しが見えているものの、いまだに予断を許さないことから、今年度もオンラ

インでの開催とすることといたしました。

昨年度のオンラインによる交流では、参加青年から「ディスカッションに参加して自分の成長を感じることができた。」といった声が寄せられました。大変充実した意見交換が行われ、その後も参加青年同士の活発な交流が続いていると承知しております。

今年度は「自由なテーマで参加青年自らが企画し議論する場」を新たに設けるなど、更に充実したプログラムを準備いたしました。

本会議に積極的に参加していただき、大いに議論いただくことで皆様が更なる成長を遂げられますよう切に祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。

令和3年11月28日
開会式

3 基調講演

辰野まどか

(第28回SSEAYP日本PY、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事)

本事業の基調講演にお招きいただき、大変光栄です。ASEAN各国や日本の、若きグローバル・リーダーである親善大使の皆さんとお会いする機会に心から感謝しています。皆さんとお会いできることをとても楽しみにしていました。本日は、グローバル・シチズンシップを通じて、より良い未来を共に作ることにについてお話しします。

まず、自己紹介から始めますね。私は一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) の代表理事で、9年前に仲間たちとGiFTを設立しました。GiFTはグローバル・シチズンシップ (地球志民) 育成を推進することをミッションとする教育機関です。また、私は、東洋大学の客員教授も務めており、グローバル・シチズンシップ教育に関係する書籍を出版したりもしています。ユネスコ (国際連合教育科学文化機関)、JICA (国際協力機構)、文部科学省、大学などと協働し、グローバル・シチズンシップ教育の普及に努めています。そして、私はSSEAYPのPYとして、2001年、つまり今から20年前にこの事業に参加しました。だいぶ歳を重ねたように感じますが、この事業で素晴らしい経験をし、

生涯の友を得ました。本事業を通じて、グローバル・シチズンシップとは何か、リーダーシップとは何かということを学びました。そして、今、皆さんがこの事業のPYに選ばれたことをとても嬉しく思います。

さて、ここで質問です。あなたにとってグローバル・シチズンシップとは何でしょうか。グローバル・シチズンシップとは、世界をより良くしたいという思い、あるいは、志、考え方、情熱です。ぜひ、あなた自身のグローバル・シチズンシップを見つけてみましょう。

では、皆さんの笑顔、そしてエネルギー・レベルを見せてください。今、とてもワクワクしていて、参加する準備がバッチリという人は、手をパーにして見せてください。それほどでもなく、まあまあ、うん、大丈夫、という感じであれば、手をチョキにして見せてください。もし、まだ緊張しているのなら、もちろんそれでも大丈夫です。緊張も大切な感情ですから、グーを見せてください。それでは皆さん、今、どんな気分でしょうか。たくさんのワクワクしている人、そして、まあまあの人いますね。なんと、緊張している人は誰もいないみたいですね! 皆さんからとても前向きな良いエネルギーをい

ただき、講演を始めることができそうです。



■ グローバル・シチズンシップ、SDGsとは何か

それでは、グローバル・シチズンシップとは何か、また、SDGsとは何かについてお話しします。今、私たちはオンラインで事業を行っていますが、皆が船に乗っていると想像してみてください。では、更に想像力を働かせて、宇宙船に乗っていると想像してください。一緒に宇宙へ行く準備はできましたか。全員で宇宙へ行き、一緒に地球を見ていると想像してください。この世界は、どのように見えますか。宇宙から地球を見て、どう感じていますか。

これは、ある宇宙飛行士が1985年に世界各国の仲間とともに旅をした際の生の声です。

「最初の1～2日は、皆が自分の国を指差した。3～4日目は、それぞれが自分の大陸を指差した。5日目、私たちの目に映っているのは、たった一つの地球だった。」

もし、私がお場にいたら、まず日本を指差していたでしょう。しかし、5日目には、宇宙飛行士全員が、地球が私たちの故郷であることに気づいたのです。一つの島でも大陸でも、特定の地域でもなく、この巨大な星、地球こそが私たちの故郷なのです。これが宇宙飛行士たちのリアルな声です。私もいつか宇宙に行ってみたいものです。

「同じ故郷を持つ私たちは、この地球社会に何をギフトすることができるのでしょうか。」これが私から皆さんへの質問です。

私がGiFTという組織を立ち上げたときから、同じ問いを投げかけてきました。未来に向けて、私たちは社会に何を贈ることができるでしょうか。私たちのミッションは、グローバル・シチズンシップを通じて世界をつなぐことです。私たちは皆、世界をより良くしたいという思いを持っていると思います。皆のグローバル・シチズンシップをつなぐことができれば、きっとより良い未来を共に作ることはできるはずです。私がこの組織を立ち上げ、グローバル・シチズンシップ育成を推進しているのはこのためです。

SDGsについては、皆さんで存じだと思います。貧困をなくそう、飢餓をゼロになど、重要な目標があり、193の国連加盟国がこの未来を分かち合おうと採択しました。しかし、これら全ての目標を達成するのは難しいと思いませんか。何から始めれば良いのかさえ分からないかもしれません。だからこそ、グローバル・シチズンシップが必要なのです。実は、SDGsの中に「グローバル・シチズンシップ」という言葉があります。全ての課題や目標に取り組む前に、私たちの志とは何かを考えてみましょう。自分が世界をどう見たいのか、本当は何をしたいのか、何が好きなのかを見つけましょう。SDGsの全ての目標を達成するためには、そういうことがとても大切なのです。そのために、私たちはとてもシンプルな「グローバル・シチズンシップ・プロセス」を次のとおり作成しました。

ステップ1「自己を知る、受け入れる」

ステップ2「相手を知る、受け入れる」

ステップ3「共に取り組み、共に新たな価値を生み出す」

ステップ4「社会に参画し、還元する」

これらは、シンプルでとても汎用性が高いステップです。SDGsを考える前に、このステップを考えてみましょう。

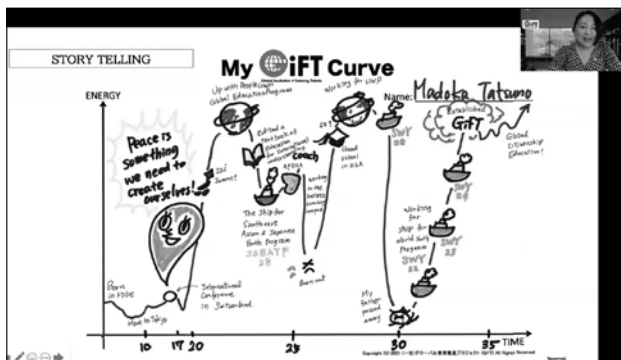
なぜ自分はここにいるのか。自分は何がしたいのか。世界をどのように見たいのか。どんな未来が見たいのか。これらの問いは全ての目標を達成するために、とても大切です。これこそが、ステップ1「自己を知る、受け入れる」ということなのです。あなたのグローバル・シチズンシップを見つけてみましょう。答えはあなた自身の中にあります。グローバル・シチズンシップとは、世界をより良くする志ということなのです。

これらのステップを踏みながら、私たちはカンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ブータンの7か国でプロジェクトを行ってきました。各国のパートナー組織とともに、SDGsプロジェクトを行っています。皆、SDGsの目標に向かって進んでいます。現在オンラインで実施している「東南アジア青年の船」青年会議も、この同じ流れの中にあります。また、日本政府と協働し、「トビタテ！留学JAPAN」にも取り組んでいます。この取組は、日本でよく知られている奨学金事業で、毎年約1,600名の学生が留学しています。GiFTでは、留学する高校生への研修を実施しており、研修では、もちろんこの「グローバル・シチズンシップ・プロセス」を活用しています。また、このような教育を普及させるべく、JICAとも協力し、教員研修にも取り組んでいます。多くの人と一緒にSDGsやグローバル・シチズンシップの推進に取り組むことは楽しいことです。世界をより良くしようという、

それぞれのグローバル・シチズンシップを見つけることができるのです。今回も、皆さんのグローバル・シチズンシップを知ることができるかと思うと、わくわくしています。

■ストーリーテリング：グローバル・シチズンシップで
良い未来を作るために

皆さんのグローバル・シチズンシップを探す前に、まずは、私自身がどのように自分のグローバル・シチズンシップを見つけたのかをお話します。既に、GiFTで行ってきたこととお話したので、もしかしたら、すごい人だと思われたかもしれません。でも、これが私の人生です。



GiFTでは、このようなグラフを使って、自分の人生を表します。横軸が年齢で0歳から現在まで、縦軸がエネルギー・レベルを表しています。幸せな時はエネルギー・レベルが高くなり、悲しい時は低くなります。私の人生は、こんなにアップダウンの激しいものでした。私は神戸で生まれ、家族皆がその出身でした。5歳の時に東京に引っ越しましたが、その時、私はこてこての関西弁を話していました。そのため、東京の友達に「まどかちゃんの変な日本語を話すのね」と言われ、ショックを受けました。同じ日本の中でも、大きなカルチャーショックを受けたのです。

その後は、大好きな学校、友人たちにも恵まれ、楽しい日々を送っていました。中学校に入学すると、周りには帰国子女が多く、完璧な英語を話す友だちがたくさんいました。私は、関西弁は話せたけれど、英語はできませんでした。完璧な英語を話す帰国子女たちと比べて、英語は敵う訳がないと思い、英語の勉強をあきらめました。私は二つの大きな言い訳をして、13歳から17歳の間、全く英語を勉強しませんでした。一つ目は「海外なんて興味ない」、二つ目は「日本人たるもの、日本語が話せばいい」。こうして4年もの間、英語を避け続けましたが、困ることもなく、単に英語の成績が悪い、というだけのことでした。ところが、ここでグラフの示すとおり、17歳の時にとっても忘れられない瞬間が訪れるのです。

17歳の誕生日の朝、母がとても嬉しそうに部屋へ入っ

てきて言いました。

「まどか、お誕生日おめでとう！17歳というとても大切な誕生日だから、夏休みにすごい誕生日プレゼントを用意したのよ。」

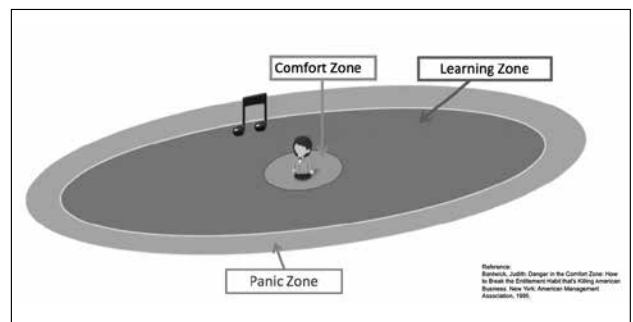
「何？」

「この夏休み、まどかは一人でスイスに行って、国際NGOが主催する国際会議に参加するの。3週間そこで過ごすのよ。」

「一人で？3週間なんて長すぎ！しかも、スイス？
大人の会議だし、私なんか国際会議に参加できないで
しょ。」

「そう、国際会議は大人の会議で、NGOのリーダー、政治家、企業の経営者、その道のプロが、世界各国から参加するの。でも、子どもを連れてくる人もいるから、誰かの子どものふりをしていれば大丈夫よ。」

もちろん、両親は一緒に来てくれず、一人で行くことになりました。



この図を見たことがありますか。これまで私は「コンフォート・ゾーン（居心地の良い領域）」で過ごしていました。毎日、同じ友人グループと過ごし、同じ学校生活、同じ日常を過ごしていました。私はよく皆と同じがいい、と言っていました。まさに「コンフォート・ゾーン」にいたのです。しかし、この「コンフォート・ゾーン」から外に出ると「ラーニング・ゾーン（学びの領域）」があり、新たな経験、新しい出会い、新しい発見があります。同じ環境にとどまるのではなく、いつもと違うものに出会うことで、自分の可能性を広げることができるのです。皆さんは、「東南アジア青年の船」青年会議に参加することで、既に「ラーニング・ゾーン」に入っていると言えます。勇気を出して自分の「コンフォート・ゾーン」から一歩踏み出した皆さんを、本当は素晴らしいと思います。しかし、「ラーニング・ゾーン」の延長線上には、「パニック・ゾーン（パニックの領域）」があります。あまりに突然、遠くへ行き過ぎるとパニックになるかもしれません。当時、一人で会議に向かった私は、まさに「パニック・ゾーン」に突入していました。

国際会議の会場はお城で、300名もの人が世界各国から参加していました。会場に入ったとき、多様な肌の色、髪の色、目の色が違う人々が、民族衣装をまとった

様子がとてもカラフルで、これぞ「国際会議」だと思ったことを今でもよく覚えています。私はとても緊張していました。

そこへ私のような、17歳のアジアの小さな女の子が入っていったのです。大人の参加者たちも気がついて、英語で話しかけてきました。会場の入口で、「アイ・キャンノット・スピーク・イングリッシュ！（英語は話せません。）」と言ったことを今でも覚えています。すると、「英語を話さないってことは、フランス語かしら？」と、皆が一斉にフランス語で話し始めました。頭が真っ白になり、すぐにでも家に帰りたくなりましたが、残念ながら日本へ帰国するすべはなく、3週間滞在する以外の道はありませんでした。

思えばあの時、会議で話されていた話題はSDGsそのものでした。貧困、差別、環境、気候変動への活動などについて、どのように平和を築けるかを議論していたのです。私は辞書を引きながら、どのようなことが話されているのか何とか理解しようとしていました。その年は、ちょうど第二次世界大戦の終戦50周年で、二度と同じことを繰り返さず、平和を築くにはどうしたらいいかを話し合っていました。会議の期間中、参加者が毎日、どのように平和を築くかについて話し合っていたことに、強い感動を覚えました。この人たちのおかげで、私はこの平和な世界で暮らしているんだ、大人たちはすごい、と思いました。

そして最終日、3週間ずっと会場にいた私に、主催者の一人が会議の感想を話してほしい、と言いました。私はもちろん、「とんでもないです、できません」と言いましたが、彼は「同じグループの仲間に、君が思ったことを話せばいいだけだよ」と言いました。そこには、国も年代も違う人が15名ほどいて、その小グループの中で、この会議を通じて何を学んだか、どんなことを感じたのかを話しました。「皆さんが世界をいかに平和にしていくかを話し合うこの会議は、本当に素晴らしいと思いました。これからこのような場がずっと続いてほしいと思います。」と言い終えてほっとしました。我ながらいいことを言った、とさえ思いました。ところが、私が言い終わった直後に、一人のお婆さんが突然、目の前でぶるぶると震え始めたので、私は何事かと思いました。その人は私に向かって叫びました。「何言っているの！」私は何か変なことを言ってしまったのだろうかと思いました。「何言っているの！これからこのような場がずっと続いてほしいと思います、じゃないでしょ。あなたが続けていくんでしょ！」私の人生はここから大きく変わりました。

この瞬間、平和とは自分たちで作り上げるものなのだ、と気付きました。英語も全然できない、世界の歴史も文化も知らない自分は、全く役に立っていないと思っていました。しかし、最年少の参加者として、私こそがこ

うした場を続けていく当事者となるのだ、と悟ったのです。歴史上の誰かが世界を平和にしようと努力を重ねているからこそ、今のこの世界があるのだと思いました。

そして、私の人生は変わりました。その後の私のグラフには地球と船があり、たくさんの国に旅をしているのが分かります。世界のことをよく知らないなら知ればいい！と考えるようになりました。「国際理解1,000本ノック」と称して、自分の「コンフォート・ゾーン」を踏み出しました。1年間休学して、アップ・ウィズ・ピープルのプログラムに参加し、22か国から集まった120名の学生と一緒に70都市を旅しました。ボランティア活動、ホームステイ、そしてミュージカル公演をしました。1年間を通じて仲間やホストファミリーから世界について多くのことを学びました。その後、SSEAYPに参加し、本当に素晴らしい仲間ができました。学びの場としてもいい経験となり、アメリカでのプログラムにどっぷり1年間参加した後だったので、また少し文化が異なることに気づきました。そこから、多様な文化的背景を持つ人といかに協調してプロジェクトを遂行していくかを学びました。私にとってはかけがえのない経験でした。そして、私はアフリカにも行き、多くの国を旅しました。世界中の国を訪れたいと心から思っていたので、アルバイトをたくさんして、春休みや夏休みに旅をしました。卒業後はビジネスコーチとして働き、アメリカの大学院でグローバル・シチズンシップ教育について学びました。21歳の時に参加したアップ・ウィズ・ピープルでも働きました。

29歳の時、「世界青年の船」事業（SWY）のファシリテーターを務めました。13か国270名の参加者がどのように平和を築いていけるか話し合っているのを見た時、私の夢が叶ったと思いました。17歳の時からグローバル教育に携わりたいという夢を追い続けてきたので、私は心から嬉しく、幸せを感じていました。

しかし、その直後に父が急死しました。人生で最も辛い時でした。母は専業主婦でした。私は、父がいなくても家族が生活できるようにしなければならず、様々な整理をするために、仕事も全て辞めなければなりません。当時、家族のことで精一杯で、自分の夢について考える暇もなく、本当に大変でした。そんな時、起きた出来事です。17歳の時から自分の夢を追い続け、「グローバル・シチズンシップ教育を通じて世界をより良くしたい」と言い続けていました。国際交流でできた、たくさんの仲間が私の夢を覚えていてくれて、「今は本当に辛い時だと思うけど、あきらめないで。まどかがずっと夢を追いかけてきたのを知っているから応援するよ。」と言ってくれました。仲間の励ましがあって、困難な時を乗り越えることができました。そして、再びSWYのために働くことになりました。素晴らしい同僚たちに恵まれ、傷も癒えてきました。3年間事業に

携わった後、ついに、GiFTを設立することができました。ご覧のとおり、特に設立期のGiFTの主なメンバーの多くは、SSEAYPとSWYの出身なのです。彼らには多くを説明する必要がありませんでした。「この事業が大好きで、多くの人にこのような教育を広めたい」と話すと、彼らは「うん、一緒にやろう!」と言ってくれました。GiFTでは、SSEAYPやSWYの価値を広めています。まさに、SSEAYPやSWYを広める親善大使とも言えます。私たちが協働する7か国のパートナーにも、SSEAYP同窓生がいます。ですから、皆さんがこの事業で築く友情は20年経っても続くもので、共に活動し、互いの夢を支え合うことができる、と声を大にしてお伝えしたいです。皆さんがこの事業に参加できたこと、人生の宝物を手に入れたことを私はとても嬉しく思います。SSEAYPのおかげで、私はこのGiFTを設立し、素晴らしい仲間たちとやりがいのある仕事をする事ができています。

17歳の時、自分の「コンフォート・ゾーン」を踏み出さなければならなかったけれど、私の航海はそこから始まりました。皆さんの航海はすでに始まっていると信じています。この事業を思い切り楽しんでください!

■タイムマシン・ワークショップ

さあ、次は皆さんの番です。タイムマシン・ワークショップを始めます。先ほど、あなたのグローバル・シチズンシップは何か、未来の社会に何を贈りたいか、と質問しました。次の世代にどのような世界を残したいですか。簡単に答えられる質問ではないかもしれませんが。それでは、これから船の代わりにタイムマシンに乗ります。準備はいいですか。今からちょうど9年後の、2030年11月28日に向かいましょう。自分の今の年齢に9を足してください。今20歳だとしたら、9年後は29歳ですね。

さあ、ここは2030年です。臨時ニュースが入ってきました。「おめでとうございます! ミッションを達成しました! SDGsの目標を全て達成することができました! 2030年、理想の世界を達成しました!」

豊かな想像力を発揮して、私たちは理想の世界を達成した、と想像してください。こんな場面設定です。あなたは、この偉業に貢献した人物として、ニュースの取材を受けます。あなたは、全ての夢を実現した成功者です。座り方や所作も成功者のように振舞ってください。私が取材する側として、以下のような質問をしますので、紙にあなたの答えを記入してください。

- ・ 2030年の世界はどのような世界ですか。
- ・ あなたは今、何をしていますか。どこに住んで、周りにはどんな人たちがいますか。

- ・ 9年前に「東南アジア青年の船」青年会議に参加されたそうですが、会議に参加したことはあなたの人生にどのような影響を与えましたか。
- ・ 2021年から今まで、あなたが社会にギフトしてきたものは何ですか。

それでは、次に進みます。改めて質問します。あなたにとってのグローバル・シチズンシップは何ですか。あなたの考えや思いを書いてみてください。例えば、「まどかのグローバル・シチズンシップは、グローバル・シチズンシップで世界をつなげることです。」どんなことでも構いません。先ほどのインタビューで答えたことを参考にしてください。SDGsを達成するための有能なリーダーになる、人々を助ける医師になるなど、自分の夢を書いてもいいです。もしくは、自然を保護する、世界中に友人を作る、グローバルな視点で地域に根ざした行動をするなど、SDGsに向けた行動を書いてもいいです。また、異文化理解の促進、皆を笑顔にするなど、価値観を書いてもいいです。あなたの思ったことが未来の次世代へのギフトとなるのです。

あなたのグローバル・シチズンシップについて書き終えたら、他の参加者が書いたグローバル・シチズンシップについて読んでください。素晴らしいグローバル・シチズンシップが共有されていますね。ありがとうございます。

- ・ 私のグローバル・シチズンシップは、世界で起きていることを理解し、この地球上の全ての生物にとってより良い安全な世界を築く方法を知ることです。
- ・ 私のグローバル・シチズンシップは、世界と協働して、共通の目的を達成することです。
- ・ 私のグローバル・シチズンシップは、地域や世界で、皆の思いやりの心を広めていくことです。
- ・ 私のグローバル・シチズンシップは、教育と、地球にやさしい環境を世界に広げていくことです。
- ・ 私のグローバル・シチズンシップは、持続可能な生活スタイルを広め、人々をエンパワーすることです。

私は、グローバル・シチズンシップを通じて世界をつなげたいと、心から思っています。ここに、300個のグローバル・シチズンシップのメッセージが集まりました。私たちが世界をより良くしたいという志をつなぐことができれば、共に素敵な未来が作れると信じています。

皆さんと一緒に、グローバル・シチズンシップを活かした素晴らしい未来が共創できると確信しています。事業を楽しんでください。近い将来、世界をより良い場所にするために、共に活動しましょう。「良い航海を!」皆さんとお目にかかれて光栄でした。積極的なご参加ありがとうございました。

第3章 ディスカッション・各グループのレポート

1 あらゆる人の活躍グループ

ファシリテーター：Mr. Martin Polaine

PY：32名

(1) ディスカッション・トピックの論点

あらゆる人の「エンパワーメント（活躍に導く）」の理想形を青年はいかに現実化できるか。

(2) 事前課題

個人課題

障害のある若者の声が届き、将来の展望が開かれる支援を、非政府組織がどのように行い得るかについて、シナリオを考案すること。非力な集団の活躍に資するためにはどうすればよいかを考えるねらいがある。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- なぜ社会の一部が非力に陥っているかを知る。
- 「エンパワーメント」とは何か、また様々な分野で何を意味するかを理解する。
- 権力や影響力を持たない者が誰であるかを知る。
- エンパワーメントがどうして必要なかを理解する。

活動

グループ・ディスカッション

- 社会の一部の人々にとって自らの声が届き、意思決定に影響を与えるうえでの障壁となっているものは何か。
- 「エンパワーメント」とはどういうことか。
- 非力であるのは誰か。
- 「エンパワーメント」の目的とは何か。

成果

- 「エンパワーメント」の定義について統一見解を持った。
- なぜ社会では一部の層が非力に陥っており、エンパワーメントが必要とされるのかを理解した。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 主なステップが何か、青年はそこでどう貢献し、社会の他のグループと協働できるかを知る。

- 多岐にわたる少数利益を支援するうえで何ができるか、青年の役割とは何かを知り、考えをめぐらせる。
- エンパワーメントに対して起こる抵抗（ある弱者層によって他の弱者層に向けられたものも含む）の性質がどのようなものかを知り、その対抗策を見出す。
- SDGsや関連する取組の目的と、それらが青年の関わりにどう影響するかを明らかにする。

活動

グループ・ディスカッション

- エンパワーメントには、前提となる要件や主たるステップが存在するか。
- 社会の様々な層に発言権をもたらすアプローチとしてはどのようなものがあるか。
- どういった抵抗が起こる可能性があるか、それに対する最適な対抗措置とは何か。
- 活躍へのサポートに対して、SDGsやその他の国際的な取組はどうすれば最も機能するだろうか。

成果

- エンパワーメントへの4大ステップを構築し、統一見解とした。
- エンパワーメントへの抵抗についてはどのようにして見つけ、対策を講じるのかを知った。
- エンパワーメントが最大化されるためにいかにSDGsを用いるかを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 個人によるエンパワーメントについて理解し、それが社会一般に目を行き届かせる指導層の養成に重要であることを理解する。
- 個人の力や行動が最も機能する方法を見出す。
- 個人及び集団の力を組み合わせて、効果を最大化する。

活動

グループ・ディスカッション

- 個人的なエンパワーメントとはどういうことかにつ

いて、また、より広範な社会にとってそれがどうして重要なのかを知る。

- b. 青年個人が他者の利益のために、どのような個人的なエンパワメントができるだろうか。
- c. 個人及び集団によるエンパワメントがいかに相互補完できるか。

成果

- a. 個人的なエンパワメントの性質と、それが集団的なエンパワメントをどのように補完するかについて意見の一致を見た。
- b. 他者を後押しするうえで、個人的なエンパワメントが最も有効活用されるにはどうすれば良いかが分かった。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 実現可能な「行動計画」を、青年の役割を含めて作成する。
- b. 特定の集団や立場を対象とした際の内容を組み立てる。
- c. 達成後に最も効果のある助力とは何か、青年の役割を含めて明らかにする。

活動

グループ・ディスカッション

- a. エンパワメントの「行動計画」の中身とは何か。
- b. 特定の立場や虐げられた集団に対してはどのような追加手段が必要か。
- c. 達成後に最も効果のある助力とは何か。

成果

- a. エンパワメントの「行動計画」を作り上げた。
- b. 特定の立場や集団に対して必要な追加手段を明らかにし、行動計画に盛り込んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Ms. Baljit Ubhey（英国検察庁（イングランド・ウェールズ）戦略・政策部長、前ロンドン地検首席検事、英国の初代「多様性及び平等」担当部長）

トピック：自己と他者へのエンパワメント

講義から学んだこと

- a. 自分を信じること及び他者を励まし励まされることの重要性
- b. 目標や大志を持ち、達成に向けて歩み続けることの必要性

(4) 成果報告

- a. DG1では、エンパワメントについて、自分で意思決定でき、自らの生活の基本的な要件を満たせる能力と主体性として定義した。活躍に向けて後押しさ

れているという状態は、同時に、他者を後押しすることができる状態であることを意味している。

- b. DG1では、東南アジアや日本における数多くの社会課題に目を向け、成功している取組の多くは若者によるものであることを知った。しかしながら、更に多くの行動が必要とされている。
- c. DG1では、エンパワメントの枠組を構築し、以下を含むものとなった。それらは計画、実行、モニタリング・報告、評価であり、これらを経て、新たな計画立案に繋がっていく。
- d. DG1の行動計画はエンパワメントの4本柱から成り、(1) 知る、(2) 在る、(3) 行う、(4) 他者に働きかける、である。
- e. 若者が必ずしもいつも経済的・時間的・人的に有利な立場にある訳ではないが、DG1では今回の行動計画が今後、青年のエンパワメントの有用なジャンプ台となることを望んでいる。

(5) 自己評価

DG1のメンバー全員が、本事業によって大変素晴らしい機会を得ることができたと認識している。「将来にわたる友情を築き、国境を越えた知見を拡張、大いに触発された」とは、メンバー全員の言葉であり、強調するところであった。さらに、今回作成した行動計画は、今後の活動に際して有用であり、効果的に使うだろうという意見で一致している。

(6) ファシリテーター所感

- a. DG1は、ディスカッションや解決策の作成においてグループとして非常に生産的であった。多くが学生で、仲間の意見を尊重する姿勢を持ち、常に有意義に分析していた。
- b. エンパワメントというトピックの性質上、繊細な問題についてのディスカッションにも及んだが、それらはすべて友好的、生産的に行われ、心を揺さぶるような個人的な経験が詳しく共有されることも多かった。
- c. グループ内では手を尽くして意思決定が行われ、常に理性的に議論し、明瞭なコミュニケーションがなされていた。
- d. 今回作成されたエンパワメントの行動計画やその4本柱の戦略は、持ち寄られた個人の経験談及び東南アジアや日本中から寄せられた学びに根差すものであった。
- e. これほど意欲的なグループのファシリテーターであることを大変光栄に思い、共に過ごした時間によって全員が意思決定力、リーダーシップ、文化横断的な意識、そして今後も続く固い友情を強められたのであれば幸いである。

2 貧困、水・食糧へのアクセスグループ

ファシリテーター：Mr. Rahmat Hidayat HM

PY：30名

(1) ディスカッション・トピックの論点

ASEAN各国及び日本において、水・食糧へのアクセスを提供し、貧困を撲滅するうえで青年がどう貢献できるかを理解する。

(2) 事前課題

個人課題

身の回りに見られる貧困、水・食糧へのアクセスに関する画像をSNS上に投稿すること。インターネットから探してきたものではなく、自らが撮影したものであること。

国別課題

貧困、水・食糧へのアクセスについての自国での課題に関する図を作成すること。提出は事業開始前とし、グループ・ディスカッションIで使用する。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. 期待される成果、スケジュール、ツールについて理解する。
- b. ファシリテーター及びPY同士について知り合う。
- c. ASEAN各国や日本における貧困問題や解決するにあたっての障壁、政策について知る。

活動

- a. 活動1：事業及びPYの紹介
- b. 活動2：国別発表：ASEAN各国及び日本における貧困問題や政策についての理解
- c. 活動3：ASEAN各国及び日本における貧困問題や水・食糧へのアクセスの問題の原因や解決するにあたっての障壁

成果

- a. PYは、期待される成果、スケジュール、そしてディスカッションの流れについて理解した。
- b. ファシリテーター及びDGの仲間について、よりよく知ることができた。
- c. 案出しにオンライン・アプリケーションのJamboardやMiroを用いて、貧困問題の根本原因について理解し、明らかにした。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 政治、経済、社会、公衆衛生、技術が、貧困や水・

食糧へのアクセスにどう影響するかを認識する。

- b. SDGsの一部として貧困を認識する。

活動

- a. 活動1：全体の振り返り及び目標の確認
- b. 活動2：PESTという手法を用いた貧困の分析
- c. 活動3：SDGsに包括される貧困、飢餓根絶、水へのアクセスについてのディスカッション

成果

- a. 政治、経済、社会、公衆衛生、技術が、貧困や水・食糧へのアクセスにどう影響するかを、PESTという手法を用いて知ることができた。
- b. SDGsの目標のうち、貧困（目標1）、食糧へのアクセス（目標2）、水へのアクセス（目標6）について理解した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 貧困に対して影響を及ぼす可能性のある状態・環境を予見することができるようになる。
- b. ASEAN各国及び日本における貧困撲滅のためのプログラムについて理解する。

活動

- a. 活動1：ゲストスピーカー講義
- b. 活動2：国ごとに、自国における貧困を減らすためのプログラムについて発表する。

成果

- a. ASEAN各国で行われている複数のプログラムについて理解することができた。
- b. 実際の事例から、貧困を減らすためのプログラムの成否を分ける要因は何かを理解した。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. M. Alif Timur Ghifari（インドネシア共和国貧困削減促進ナショナルチーム計量分析専門官）

トピック：ASEANにおける貧困削減と、その進展・プログラム・障壁

講義から学んだこと

- a. 貧困問題に対峙する際、必ずしも大掛かりなプログラムを実行する訳ではない。
- b. また、直ちに賃金や消費のレベルを上げるようにしなければならない訳ではない。
- c. 重要なのは、事業介入等により、中長期的に賃金や

消費を向上させる見通しが立っていることである。

グループ・ディスカッションⅣ

ねらい

- 政策がどのようにつくられているかを理解できるようになる。
- 政策立案ができるようになる。
- 立案した政策を利害関係者に説明できるようになる。

活動

- 活動1：全体の振り返り及び目標の確認
- 活動2：貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題への解決策の案出し
- 活動3：互いに立案した政策についての評価・意見交換

成果

- 現状に存在する実際のもしくは代替の解決策を分析して、政策立案することができた。
- 利害関係者が誰かを明らかにし、相関図をつくり、立案した政策の利害関係者への説明が可能になった。
- PYは発表を成功に収め、貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題に青年として参画することを宣言した。

(4) 成果報告

ディスカッションの成果報告の内容は、貧困や水・食糧へのアクセスに関する問題の発見、各国で実施されている代替策、それらに対する分析と政策提言、そして青年による貢献についてなどであった。発表は、ブルネイ、インドネシア、ベトナムからの3名のPYが担当した。

(5) 自己評価

成果報告後の最後の集まりで、PYは自己評価について共有し合った。Zoom会議中に、オンライン・アンケート調査と口頭での評価を実施した。以下はその抜粋である。

- 参加者の一部は緊張していたため、全体ディスカッションの際になかなか発言できなかったものの、「東南アジア青年の船」青年会議は、ASEAN各国及び日本の青年と交流し、繋がりを持つとても良い機会であった。
- 大多数のPYが本事業で多くを学び、得た知識や能力を学問や仕事に活かしたいと述べた。
- なかには、自国に慢性的な貧困が見られないことを知り幸運に思ったPYもいたが、同時に、貧困の渦中にいたり、困難な生活を強いられていたりする他者へより寄り添えるようになった。
- 本事業終了後も繋がりを持ち、コロナ禍が終われば実際に会いに行けることを望むという意見で全員が一致した。

(6) ファシリテーター所感

- 全体ディスカッションでは積極的でないPYも見られたため、全員に発言を促すうえでブレイクアウト・ルームはとても有効だった。
- 時間の制約や技術的な問題が発生したため、手法や事前に計画していた活動の調整を行った。
- 次回は船内でのディスカッションができることを心待ちにしている。

3 働き方と経済成長グループ

ファシリテーター：Ms. Dini Hajarrahmah

PY：31名

(1) ディスカッション・トピックの論点

雇用が大規模に喪失されたコロナ禍後の社会において、質が高く働きがいのある人間らしい仕事を供給することで、ASEAN各国及び日本の青年をいかに動員して持続可能な雇用と経済成長を達成できるだろうか。

(2) 事前課題

個人課題

- コロナ禍と若者の失業問題についての事例の記事を2本読むこと。
- 以下を始めとした質問に対する回答を1ページのパワーポイントで作成すること。雇用及び働きがいのある人間らしい仕事の定義とは何か、将来の仕事像

はどうなっているだろうか、本トピックに関して自国で最も高い障壁となっている問題は何か、自国において最も弱者の立場にあるのは誰か。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションⅠ

ねらい

- 「働き方と経済成長」に関して全てのPYの背景や興味関心、考えや現状打破への気持ちを知る。
- SDGsの一部としての「働き方と経済成長」について理解する。
- 本トピックの最も困難な問題は何か、また、コロナ禍で失業に見舞われ最も影響を受けたのは誰か、を

理解する。

活動

- a. トピックに関する発表を行い、個々人の身の回りに起きた経験を共有し、各自の基礎知識や何を学びたいかを持ち寄って議論を行う。
- b. チームに分かれてブレイクアウト・ルームで自分の言葉で「働き方と経済成長」を説明し、本トピックに関してASEAN各国及び日本において最も困難な課題は何かを議論し、コロナ禍における失業で最も影響を被ったのはどういった層なのかを議論する。
- c. 全体での発表

成果

- a. クイズを交えて楽しく他の参加者と知り合うことができた。
- b. 6つのチームに分かれ、チームごとに「働き方と経済成長」の定義、本トピックに関する障壁、失業によって最も影響を受ける層について検討した。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 持続可能な働き方と経済成長に向けた、職場における「共生と多様性」について、見本となる取組から学ぶ。
- b. 「職場における無意識の偏見」について学ぶ。
- c. チームで「平和と根気強さを生み出す、働きがいのある人間らしい職場環境には何が必要か」を議論する。

活動

- a. 事前のミーティングで提供された文献及び動画についての総論的なディスカッション。
- b. 「持続可能な働き方と経済成長のための共生、多様性、平等」について見本となる取組から学ぶ。
- c. ブレイクアウト・ルームに分かれて、チームで「平和と根気強さを生み出す、働きがいのある人間らしい職場環境には何が必要か」を議論する。
- d. 「最も働きがいのある会社」からの主な学びについて発表を行う。

成果

- a. 職場に共生、多様性、平等をもたらすこと、そして特に、同僚への「無意識の偏見」について、より意識的になった。
- b. 平和と根気強さをもち、最高の職場環境には何が必要か、また、働くのに理想的な会社を求める要素を明らかにできた。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 「起業家精神」の重要性及び、これをどう養い、青年の雇用を促せるかを理解する。

- b. 変化を促進し、雇用及び働きがいのある人間らしい仕事を生む「社会起業」の役割を理解する。
- c. LEAN CANVASというツールを用いて、#DecentJobsForYouth（若者のための働きがいのある人間らしい仕事）を促進するアイデアを考案する。

活動

- a. 青年の雇用のための「起業家精神」と、変化を促して地方に働きがいのある人間らしい仕事をもたらす「社会起業」の役割を学ぶ。
- b. ブレイクアウト・ルームに分かれて、チームで議論を行い、6つの役割（政府、民間、スタートアップ、中小企業、社会起業、非営利組織）に基づくLEAN CANVASに取り組む。そして、起業家精神を用いて、問題点と#DecentJobsForYouthの促進のための解決策を見出す。
- c. LEAN CANVASについてのアイデアを発表する。

成果

- a. LEAN CANVASの使い方を学んだ。
- b. 職場での起業家精神を発揮することを意識するようになった。
- c. 4つの立場（政府、民間、スタートアップ、社会起業）を代表する#DecentJobsForYouthの促進に向けた創造的なアイデアについて発表した。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. より意義ある働き方と経済成長をもたらす、失業問題に立ち向かううえでの社会起業の重要性を、ゲストスピーカーの話から理解する。
- b. ゲストスピーカーとPY間のネットワークを築く。
- c. 成果報告のアイデアについて最終検討し、事後活動を考案する。

活動

- a. アイスブレイクの後、事後活動プロジェクトの議論を行う。
- b. ゲストスピーカー講義
- c. 事後活動プロジェクトに関する発表及び投票

成果

- a. ゲストスピーカーの成功例から大いに触発され、各自がそれを応用する意識が芽生えた。
- b. PYはとて前めのりな姿勢を示し、Arunaの事業と社会に与える影響に関して、ゲストスピーカーにたくさん質問をした。
- c. 地方のコミュニティを力づけると同時にグローバル企業にもなる代表的な社会的企業の築き方について学んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Ms. Utari Octavianty

(PT Aruna Jaya Nuswantaraチーフ・サステナビリティ・オフィサー)

トピック：社会的企業としてArunaはいかにインドネシアの地方から漁師とその家族の生活を変え、働き方と経済成長の問題に向き合ったか

講義から学んだこと

- ビジネスモデル、組織文化、マーケティング戦略など、社会的企業Arunaについて包括的に学んだ。
- 職場に必要なものを提供することで、地方の沿岸部における女性のコミュニティをいかに後押ししたかを学んだ。
- コロナ禍での経営における一貫性と根気強さをどのように維持するかを学んだ。
- 青年の雇用を支援する方法を学んだ。

(4) 成果報告

PYはディスカッション成果の総括として動画を作成した。動画は、ASEAN及び日本の各国の言語での挨拶から始まり、ブルネイとフィリピンの2名のPYにより以下の点について発表が行われた。

- PYが考えた、ASEAN各国及び日本における働き方と経済成長に関する問題についての説明
- それらの解決策として検討した内容
- 事後活動として、「YEM (Youth Empowerment : ユース・エンパワメント) 会議」と題したプロジェクトを考案した。これは、DG3のPYが主催し、全てのDGの参加者をユース・アンバサダーとして招待するものである。この会議はオンライン上のウェビナーとして開催され、職場文化、キャリアプ

ラン、コロナ禍後のキャリア観の傾向や変化といった、ASEAN各国及び日本における働き方と経済成長に関して話題になっているトピックを扱う。そして、ワークショップ、キャリア相談、即興ネットワークワーキングなどの活動も行う。

(5) 自己評価

- 本事業で何を学び、どのような成長を自覚しているかについてディスカッションを行った。
- 働き方と経済成長についてのSDGsの要点を広め、ASEAN各国及び日本において、持続可能な働きがいのある人間らしい仕事を増やしていくうえで現実社会に貢献すべく、PYは今後の行動計画（事後活動プロジェクト）を持つに至った。

(6) ファシリテーター所感

当初、私は「東南アジア青年の船」青年会議がオンライン開催であり、実際に船内で行う場合に比べ、示唆に富む経験が減るのではないかと危惧していた。しかし、あらゆる障害がありながらも、毎週日曜のわずか5回の顔合わせで我々のDGに生まれた創造性、協調の精神、そして友情を目の当たりにして驚嘆を禁じ得ない。働き方と経済成長について学んだのはPYだけではなく、私も、グループをととても多様かつ豊かで、非常に楽しいものにしてくれた、様々な背景や経験を持つ全てのPYから多くを学んだ。このようなことから、そして、私を素晴らしい本事業の一員としていただけたことに対して、日本政府及び一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様にご感謝申し上げます。

4 教育グループ

ファシリテーター：Mr. Somkiat Kamolpun

PY：31名

(1) ディスカッション・トピックの論点

生きる・学ぶ：いかに生涯学習の体験と成果を増やすか。

(2) 事前課題

個人課題

全てのPYは、SDGs目標4について概要を読むこと。

国別課題

自国における教育について発表を用意すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 教育、生涯学習、SDGsの基本的な概念や目標について知る。
- ディスカッションからアイデアを生む、発散と収束の技術を使えるようになる。

活動

- ゲストスピーカー講義
- SDGs達成のために必要な能力と、個人、国家、政治、経済、社会の面から見た教育の役割について議論する。

成果

- SDGsを達成するうえで必要な能力として、偏見のない柔軟な考え方、協調性、批判的思考、リーダーシップ及びコミュニケーション能力、臨機応変な適応性、根気強さなどが挙げられた。
- 教育や学習は、特に個人における知識・スキルや行動の成長、そして国家・地域・国際レベルでの政治的・経済的・社会的な発展に及ぼす影響力が大きいと結論付けた。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Asst. Prof. Dr. Romyen Kosaikanont (SEAMEO RIHED (東南アジア教育大臣機構・高等教育開発センター) ディレクター)

トピック：SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」に対する青年の持つ力

講義から学んだこと

- SDGsのために青年が担う役割と重要性。国際、地域、国家レベルでの多くの事例が話し合われた。
- SDGs目標4及び7つのターゲット並びに実行手段。さらに、成果報告の礎となる、SDGs達成の障壁についてグループで議論がなされた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

ASEAN各国及び日本で共通する教育目標や困難、政策について理解する。

活動

- 国ごとに自国の教育制度、困難、方針について発表する。この発表内容は国別課題に該当する。
- 他国の発表を受けて、何がうまくできていて、何を将来的には改善すべきかに焦点を当てて、生産的なコメントを行う。
- 各国で共通する教育目標や困難を明らかにすることで総括とする。

成果

1. コロナ禍からの回復、2. 教育の質の向上、3. 教育へのアクセス向上が、共通する教育目標であった。
1. 時代遅れのカリキュラムや学習法、2. 貧困と不平等、3. 教師の質、4. デジタル・リテラシー、5. 生徒の精神衛生が、共通する困難であった。
- 発表や意見に対してどのように生産的なコメントや提案を行うかを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 生涯学習、教育の質とアクセス、様々な学習法、アウトプット型の教育の概念について理解する。
- (年齢、性別、身体的、精神的に) 様々な層の学習

者に必要な能力を明らかにする。

- 学習者の需要に合った、アウトプット型の授業や手法を練ることができるようになる。

活動

- 教育の質やアクセスの概念、様々な学習者層について議論する。
- 小グループに分かれて、従来の学生年代、社会人、高齢者、特別支援の必要な学習者、特に身体的・精神的な障害を持った学習者のそれぞれに必要な能力が何かを見出す。

成果

- 教育の質の概念に関する論説として、1. 非凡さ、2. 完全性あるいは整合性、3. 目的適合性、4. 資金に見合う価値、5. 変容について、理解した。
- アクセスについては、学習者の背景に合わせた授業や手法を設計する過程であることを理解した。
- 講義型、グループワーク、共同作業型の学習など様々な学習方法について理解した。
- 様々な学習者について、何のために彼らが学ぶ必要があり、学習へのアクセスにどのような障壁があるのかなどの知識を得た。
- アウトプット型の授業や手法を練るスキルを身につけた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- 自らの必要性や効果に照らしながら、様々なツールや手法を活用して、困難や課題を明らかにすることができるようになる。
- 明らかにした困難や課題に対峙するプロジェクトを構築できるようになる。

活動

小グループに分かれ、自分たちが取り組みたい課題を定め、プロジェクトを形成し提言を行う。

成果

- 2点の重要な課題が挙げられた。1. 教育への平等なアクセス、2. 教育と労働市場との間に生ずる乖離。
- 1点目については、オンライン／ハイブリッド型の教育手法が平等な教育へのアクセスを向上させると、3チームが主張した。学習者の範囲としては、コロナ禍により登校できない者から、社会人、高齢者、障害を抱えた柔軟な学習が必要な学習者まで挙げられた。
- インターネット通信、情報格差、デジタル技術を活用する能力、オンライン授業の質などに懸念が挙げられた。
- 以下の提言が行われた。1. インターネット・アクセスを促進し、情報格差を減らす、2. 情報通信機器を学習者に付与する、3. インフラ開発への経済的支

援、4. 精神面での支援、5. 個別学習の向上、6. 指導者及び学習者のデジタル・リテラシー向上。

- e. 教育と労働市場との間に生ずる乖離については、時代遅れのカリキュラム及び実社会との連動が薄いことが主要因であると主張された。学習者に将来の仕事に向けて備えさせるためには、カリキュラムを更新し、ソフトスキルを養うことと就労体験を組み込むことが重要であり、さらに、教育の授業策定や運営における各利害関係者とその役割について明らかにする必要がある。

(4) 成果報告

主に教育の質とアクセス、特に不就学児、格差、デジタル・リテラシー、精神衛生上の問題について発表がなされた。また、質の高い教育への共生的で平等なアクセスを確かなものとし、コロナ禍後の時代における生涯学習の促進が目標に掲げられた。そして、以下の提言がなされた。1. 学習者のデジタル・リテラシーと教育インフラの情報技術を促進させること、2. あらゆる背景を持つ人々に対して教育へのアクセスを確かなものとするべく、より柔軟な体制をとり、革新的な教育・学習法を採用すること、3. 学習者にとって必須の能力を育成することに注力したカリキュラムの更新。

(5) 自己評価

PYは、何を学んだかについてフィードバックを行い、自らの研究や仕事に活かすことができた。教育につ

いて、特に障壁や多様な学習者層、教育手法をより知ることができ、さらにデザイン思考やプロジェクト企画の基本概念について理解することができたグループで振り返った。PYはここで学んだ内容、特にグループワークや時間管理、プロジェクト企画や管理、批判的・体系的に思考するスキルを、各自の研究や仕事に活かすことができるだろう。

また、グループ・ディスカッションの場をより積極的に興味深いものにするためのコメントも寄せられた。例としては、ゲーム、アイスブレイク活動、毎回の冒頭で一般的なトピックについて議論する、などである。PYの懸念として特段多かったのは、言語の問題や、本DGのトピックに関する基礎知識であった。

(6) ファシリテーター所感

コロナ禍の中、ASEAN各国及び日本の青年たちに対して、力を合わせて交流し、友情を結ぶ機会を提供した日本政府に賞賛を送りたい。本事業を継続することが、我々の不屈の精神と、いかに地域連携及び草の根の繋がり、そしてSDGsに向けた青年の役割を大切にしているかを物語っている。

ファシリテーターとしては、PYの高潔さ、共感力や互いに協力し学び合う姿勢に感銘した。その能力と可能性の高さを備えた彼らが、近い将来、ASEANと日本の連携やSDGsの達成のための力強い土台となって貢献してくれるだろう。

5 強靱なまちづくりグループ

ファシリテーター：Ms. Pannaritsara Chuenjittrabhiramon
PY：28名

(1) ディスカッション・トピックの論点

特にコロナ禍後を見据えて、現在の世界情勢、環境問題、そしてASEAN各国及び日本における自然災害について理解することで、青年がどのように、持続可能で強靱かつ環境にやさしい、自分たちや他者の未来が明るくなるようなまちづくりができるか。

(2) 事前課題

個人課題

1. 本DGを希望した理由、2. 何を学ぶことを期待しているか、3. 自分が現在住んでいるまちについてどう思うか、4. 青年として、自らのまちをより良くするには何ができて、何をすべきか、について述べた最大500語（英文）のレポートを提出すること。

国別課題

同じ国のPY同士で、自分たちの住むまちの好きな点と嫌いな点、また、変えたい点があるとしたら、その理由とどのように変えたいか、について議論すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- SDGs目標11及びその重要性についての基礎知識を得る。
- 各国の都市計画、ソフト及びハードのインフラ、環境問題や自然災害、そしてなぜ強靱で持続可能なまちづくりが必要かについて、全てのPYがより一層意識を高めるようになる。

活動

- a. PY同士の自己紹介。
- b. 強靱で持続可能なまちとは何かについての意見交換。
- c. 目標11「住み続けられるまちづくりを」を始めとしたSDGsの17の目標と、持続可能な開発に対するその重要性についての紹介。その際、持続可能な開発とは、物質的、財産的、技術的、経済的な開発だけではなく、人間的という点についても含まれている。
- d. ASEAN各国及び日本における環境、自然災害、生活に対するコロナ禍の影響、ソフト及びハードのインフラに関する問題について自らの懸念や意識について共有する。例としては、公共空間、交通インフラ、ごみ処理問題、エネルギー消費、きれいな水や食糧へのアクセス、医療、教育制度、若者の雇用機会、気候変動や汚染問題などである。

成果

- a. 強靱で持続可能なまちについて、より視野が広がった。
- b. 自分たちのまちにおいて、一段と悲惨になり、多発するようになった環境問題、また、ソフト及びハード両面のインフラについて、自然災害や人災が影響を及ぼす可能性のある問題、誤った都市計画や環境への無頓着は人々の生活やあらゆる都市住民の健やかな暮らし、財産、雇用や学習機会を脅かしかねないことについて、かなり意識的になった。
- c. 都市計画やまちづくりにおいては、全ての住民の健やかな暮らしを考慮することの重要性を学んだ。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 実際に強靱で持続可能なまちづくりや設計に関わっている専門家と繋がり、交流して学ぶことで、このようなまちに対しての視野を広げる。
- b. 強靱で持続可能なまちづくりに、自分の情熱や職業をいかに活かせるかを考える機会とする。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. ゲストスピーカー講義で得た学びの共有

成果

- a. まちは、現在及び将来のすべての住民にとって強靱で持続可能な設計と計画を施さなければならないということに、より意識的になった。
- b. 視野が広がり、自分たちが生活の中の活動や職業を通して、まちを強靱で持続可能にすることができると知った。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：1. 菅野勇（三菱地所設計アジア社シンガポール所長・ディレクター）、2. 鯉淵祐子

（三菱地所株式会社スマートエネルギーデザイン部長）
トピック：日本の東京・丸の内における強靱で持続可能なまちづくり

講義から学んだこと

三菱地所及び三菱地所設計の沿革、事業、そして持続可能な開発に重きを置いた目標、そして100年以上前に東京丸の内から始まった両社の持続可能な都市計画や開発について学んだ。そのほか、人間を中心に据えた持続可能な開発、そして持続可能なまちづくりは人の安全性と利便性、地域の将来的な成長に注力しなければならないこと、CLT（直交集成板）のように環境に優しくゴミを生まない物資やエネルギーを使用することの重要性、まちづくりは人・地球環境・利益のバランスを取ることが必要であることを学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. チームで協力したり案出しを行ったりして、自分たちのまちに存在する問題の原因とその解決策を明らかにする機会を持つ。
- b. 自分たちのまちに正の変化をもたらすためのリーダーシップや行動をとることを後押しする。

活動

- a. 国ごとに、自分たちのまちの好きな点と嫌いな点、問題の原因、提案する解決策について発表した。
- b. 他のPYの発表を受けて、意見交換や提案・懸念の共有を行った。

成果

- a. 食糧問題や渋滞、教育、医療、歩道の悪状態、騒音や汚染、非効率な官僚体制、汚職、開発途上国に見られる質の低い住宅事情、失業、高齢化など、多くの都市は似たような問題を抱えていると知った。また、先進国と開発途上国とは異なる問題があることも学んだ。たとえば、多くの開発途上国ではスラム街やホームレスの問題を抱えるが、日本では空き家問題があり、シンガポールでは先進的な行政がありながらもゴミ処理問題を抱えている。
- b. 他の都市の良い事例と悪い事例を学ぶことで、強靱で持続可能なまちづくりに対して視野を広げることができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. リーダーシップを発揮し、既存の枠にとらわれない考え方をもち、行動を起こすことで、SDGs目標11に適う、強靱で持続可能なまちづくりを行う後押しをする。
- b. まちづくりプロジェクトを企画し、自らが情熱を持つものを活かしてまちを強靱で持続可能にする、と

いう機会を与える。

活動

- a. 強靱で持続可能な自分の理想の都市におけるソフト及びハードのインフラについて、また、いかに人・地球環境・利益のバランスの取れたまちづくりができるかについて議論した。
- b. 特にコロナ禍後を見据えて、強靱で持続可能なまちづくりに対する情熱とキャリアプランを携えた青年として、そのような自分の理想の都市で何ができるかを議論した。

成果

強靱で持続可能なソフト及びハードのインフラ、また、人・地球環境・利益を等しく考慮したシステムや活動に注力した、まちの理想像を作り上げた。

(4) 成果報告

全4回のディスカッションの成果として、理想的な強靱で持続可能なまちについて発表した。発表では、多くの都市で起きている環境及び社会課題、ソフト及びハードのインフラに被害を与える自然災害や人災、そして環境にやさしい社会的・文化的な活動による人の安全・地球環境・利益を考慮した、新たな強靱で持続可能なまちづくりについて語られた。

(5) 自己評価

このDGでの学びや得たもの、参加して自分がどう変わったかについて話し合われた。

(6) ファシリテーター所感

全てのPYが成果発表に向けて協力し助け合うようにするため、成果発表の準備のための時間を設けて参加必須とすることが、本事業にとって有益だと思料する。

6 健康とウェルビーインググループ

ファシリテーター：Ms. Carmela D. Barcelona

PY：33名

(1) ディスカッション・トピックの論点

より健康的な明日のために、今日の青年はどう変化を起こせるか。

(2) 事前課題

個人課題

- a. 以下について自分に関する動画（最長1分間）を撮影すること。
 - ・ 名前
 - ・ 国と出身地
 - ・ このDGに期待すること
 - ・ 自分の今の健康状態を5段階（1～5）で評価
- b. グループ・ディスカッションに備えて、以下の資料を読み込むこと。
 - ・ ランセット委員会「グローバル・メンタルヘルス及び持続可能な開発」
 - ・ 世界保健機関（WHO）「メンタルヘルス・アクションプラン2013 - 2020」
 - ・ アドボカシー・ガイド：WHOメンタルヘルス・アクションプラン更新版
- c. 資料に関連して、以下に対する回答を提出すること。
 - ・ 自国でのメンタルヘルスに関する主な問題は何か。
 - ・ 自国でのメンタルヘルスに関して現在行われている取組は何か。

- ・ 青年が主導するものを含め、自国でのメンタルヘルスを守り、また、メンタルヘルスの対策を促進している最優良事例を挙げよ。
- ・ メンタルヘルスを促進している主な利害関係者（公共・民間）は誰か。
- ・ 自国では、メンタルヘルスに関する国家計画や戦略はあるか。主な目的・戦略・介入手段について概説せよ。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. 健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについて定義する。
- b. コロナ禍前、また、コロナ禍での個人の状況における健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについて理解する。

活動

- a. 健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングの定義について図画を用いて各自取り組み、全体で共有を行った。
- b. 各自が自分を最もよく表すものを用いて、自己紹介を行った。

成果

好評だったのは、自分や健康、メンタルヘルス、ウェルビーイング、そしてそれらがコロナ禍の生活でどう影響を受けたのかを主題として各自ユニークに表現したことであった。また、各自異なっているにもかかわらず、似たようなものの見方をしていることに気づき、健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについての共通見解を持った。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- メンタルヘルスに関する国際事情について述べる。
- SWOT分析（強み・弱み・機会・脅威）を用いて、メンタルヘルスについての国家レベルの最優良事例や格差について議論する。

活動

- ゲストスピーカー講義
- 国別に分かれ、メンタルヘルスについての自国での最優良事例や格差についてSWOTを用いて議論し、国ごとに全体で共有を行った。

成果

各国におけるメンタルヘルスを取り巻く現状の障壁や戦略を明らかにして、ASEAN各国及び日本でのメンタルヘルスに関する状況が類似していることに気づいた。これは、「東南アジア青年の船」青年会議の戦略的なプラットフォームを、地域内で提携して調和のとれた解決策を作り上げる一つの機会として認識させるものとなった。既にSWOTに慣れている者もいたが、他のPYにとっては、新たな学びとなった。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Dr. Agnes Joy Casiño
（フィリピン共和国保健省国立メンタルヘルスセンター戦略管理・連携オフィス責任者・医務官）

トピック：国際的・地域的なメンタルヘルスの概要

講義から学んだこと

1. メンタルヘルスの問題についての国際的及びASEAN各国・日本の統計情報、2. コロナ禍が健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングにどのような影響をもたらしたか、また、それによりメンタルヘルスを守り促進する緊急の必要性がどのように浮かび上がったか、3. ストレスへの健康的な対処法について学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- ASEAN各国及び日本におけるメンタルヘルスに関する優先的な行動領域を明らかにする。
- メンタルヘルスを取り巻く内外の利害関係者について相関図を作る。

活動

- 冒頭に10分間のマインドフルネス活動を行い、一部のPYがその活動中に何を知覚したかを共有した。
- 前回行った包括的なSWOT分析を用いて、ASEAN各国及び日本において共通する、優先的に解決すべき問題の上位5つを定めた。
- 優先的な問題に照らして、それらを解決するうえで青年が連携できそうな内外の利害関係者について相関図を作った。

成果

DGとして、素晴らしいチームワークと批判的思考で、開かれた議論を行った。率先して議論を主導するPYが直ちに現れ、その後、活動内容を記録する役目に2名が名乗り出た。PYは事例を引用し、各々の国の状況を伝えながら、自分たちが選んだ優先的に対処すべき問題について明瞭に説明することができた。発想豊かに、そして柔軟に、投票やブレイクアウト・ルームの機能を用いることで、素早い意思決定や効率的な議事録作成が可能となった。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- ASEAN各国及び日本における調和のとれたメンタルヘルスに関する行動計画を作成する。
- 成果報告の準備。

活動

- 冒頭に10分間のマインドフルネス活動を行い、前回話すことができなかったPYが、何を知覚したか共有した。
- 各国が揃うように3チームに分かれて、前回の上位5つの優先課題への対処計画を、図表を用いて作成した。各課題に対して、戦略的目的、活動、ターゲット層を設定し、適切な内外の利害関係者と結び付けた。これらは全体で共有がなされた。
- 成果発表の準備を進めるための委員会を、各国から1名ずつ集めて結成した。

成果

ASEAN各国及び日本における優先課題を対処することに役立ち、メンタルヘルスを守り促進する既存の戦略を強化するような、青年主導の活動を提案するうえで、PYたちは問題解決スキルを発揮した。国混合の班分けは、各自が自国について話すことを促し、なかには進んで班のリーダーや議事録、発表者を担う者もいた。最後に、本DGの発表のための委員会は各国からメンバーを募り、国ごとに成果発表に向けて望ましいトピックが選択され、提出やトピック課題のまとめ、委員会、予行演習に向けた予定が組まれた。

(4) 成果報告

ブルネイ、インドネシア、マレーシアのPYがグループ・ディスカッションの要点について発表を行った。それには、健康、メンタルヘルス、ウェルビーイングについての図画を用いた定義、内外の利害関係者、共通する優先課題、ASEAN各国及び日本での現在のメンタルヘルスについての取組、本DGの行動計画の統合版が含まれた。質疑応答では、メンタルヘルスに対処する際の典型的なメディア例についての質問に、タイのPYが包括的に回答した。

(5) 自己評価

全員で「東南アジア青年の船」青年会議での個人及びチームとしての成果について振り返りを行った。具体的には、最初は消極的であったがすぐに場に慣れたこと、人前で話すことへの尻込みや英語で話すことへの自信の無さを、友好的で居心地の良い雰囲気のおかげで乗り

越えることができたこと、批判的思考力や問題解決スキルを伸ばし、相互に学び合うなどを期待通りにできたこと、助け合ったチームワークと明るい雰囲気、素晴らしいアイデアが全員に対して、十分に共有されたことを一人ひとりが感謝している、などである。

(6) ファシリテーター所感

時間管理について、特に最初の2回においては難しかったが、スクリーンタイマーの使用や各自の効率的なプレゼン能力と意識改革により段々と改善された。総じて、グループ・ディスカッションに対して、大半のPYは満足又は大変満足と回答し、また、回を追うごとに満足度が上がっていった。さらに、多くのPYが総合的な自己評価を非常に良い又は素晴らしいと回答している。PYの多大な努力、創造的なアイデア、事前課題における熱心な取組、そして全体及びブレイクアウト・ルームでの議論は大変賞賛に値するものであった。

7 森林環境及び生物多様性グループ

ファシリテーター：Dr. Vivien How

PY：27名

(1) ディスカッション・トピックの論点

青年の力を活かして持続可能な森林環境及び生物多様性をより豊かにするうえでの課題と機会は何か。

(2) 事前課題**国別課題**

同じ国のPY同士で、自国における「持続可能な環境に対する危機や汚染といった問題への地域的・国家的な手立て」を共有すること。国ごとにパワーポイントにまとめられた5分間の発表を行う。

(3) 活動内容**グループ・ディスカッションI****ねらい**

- 森林環境及び生物多様性に関する問題の一般的知識を得る。
- ASEAN各国及び日本における環境問題への解決策について理解し、地球のエコシステムと生物多様性に対する潜在的な環境危機と結び付ける。

活動

- PY同士によるアイスブレイクの時間を取った後、「森林環境及び生物多様性」についての各自の考えや意見を話し合った。
- SDGsについて、また、森林環境及び生物多様性に関

するSDGs目標15のゴールとその尺度について、ファシリテーターから説明した。

- ASEAN各国及び日本における、複雑で一筋縄ではない環境問題をめぐる状況に対処するうえでのシステム思考の考え方をファシリテーターが論じた。
- グループ型のシステム思考の練習を行った。ASEAN各国及び日本における環境事情や環境危機、また、そのような状況の中、地球のエコシステムや生物多様性に対して起きる影響を氷山モデルにまとめた。

成果

- 環境関連の開発問題が相互に結び付いていることを浮かび上がらせるための問題解決枠組みの基礎として、システム思考を用いることができるようになった。
- 環境問題に対する視野が広がり、氷山モデルに取り組んだ際には、顕在化していない要素を含めて環境問題を見ることができるようになった。

グループ・ディスカッションII**ねらい**

- 気候変動及び森林破壊に関する事例を通じて、ASEAN各国及び日本の青年と持続可能な環境に向けた地元及び地域的な解決策を結び付ける。
- 様々な国の各事例について、他の地域でもできるかどうか、文化や社会経済的背景の違いを考慮して議

論する。

活動

- a. 地元又は地域の事例を通じて持続可能な環境に向けた解決策をまとめ、共有した。
- b. 共有された事例に基づき、ASEAN各国及び日本の青年が環境問題の解決を実現するにあたっての課題や機会について議論した。

成果

- a. ASEAN各国及び日本における文化横断的な議論を行いながら、環境問題に対する様々な慣行の背景や目的について学んだ。
- b. 国ごとの強みや弱みに基づいて、各種環境プログラムの継続や実施における機会及び課題を明らかにできるようになった。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. ASEAN各国及び日本における制度的な持続可能性を構築するためのツールとしてサイエンス・コミュニケーションを活用した環境活動に対する青年の参加を促す。
- b. 青年を巻き込み、森林環境及び生物多様性を促進するうえでのサイエンス・コミュニケーションにはどのような側面があるのか探る。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. 事例研究

成果

より豊かな環境を促進し、自らの思想信条を行動に起こすことに青年を巻き込むなど、サイエンス・コミュニケーションの各側面について学んだ。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Heng Kiah Chun（グリーンピース・マレーシア活動家）

トピック：サイエンス・コミュニケーションと公衆関与を通じた環境活動に対する青年の参画

講義から学んだこと

- a. 科学を戦略的に利用して、自らの主義主張をしっかりと発信し、意思決定に影響を与え、環境問題に対する行動を動機付けることを学んだ。
- b. 様々な立場（行政、民間、非政府組織）における、環境問題に対する自らの考えを行動に起こしたサイエンス・コミュニケーションの事例を複数知った。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

ASEAN各国及び日本における適切な戦略や守るべき原則について概説することで、持続可能な環境管理に関する青年の行動について課題と機会を探る。

活動

- a. PYは、様々な立場（行政、民間、非政府組織）に分かれ、持続可能な環境と森林環境及び生物多様性の問題に関する青年の行動についてのロールプレイを行った。
- b. ASEAN各国及び日本におけるより緑豊かな環境を促進する政策や戦略を共有し、地球市民としての課題や機会についてまとめた。

成果

- a. より緑豊かな環境の促進に加わったり実行したりするうえでの様々な切り口について、地球市民として自らの考え（機会や課題）を話し合った。
- b. ASEAN各国及び日本において将来的に取り入れられる、組織的な環境イデオロギーについてまとめた。

(4) 成果報告

本DGのトピック「森林環境及び生物多様性」についての発表は、ASEAN各国及び日本における森林破壊の状況を統計と動画を用いて紹介することから始めた。次に、より豊かな環境を確保するための行政、民間、非政府組織による現行の優良事例、そしてASEAN各国及び日本において将来的に取り入れることができる可能性のある、「ユース・シーディング・ハウス」という青年による種まきプロジェクトの持続可能な解決策を紹介した。その後、より豊かな環境を呼びかける全体メッセージをもって締めくくった。

(5) 自己評価

PYは自己評価についてチャットボックスにコメントを書き込んだり発言したりした。また、PYとファシリテーター双方の評価や、本DGの単元や活動についてもコメントした。そして、SNSを通じて、より環境を豊かにしていくため、啓蒙活動を続けることがPYから提案された。

(6) ファシリテーター所感

グループ・ディスカッションが始まる前に基礎知識について各PYが理解できるように、事前の設問や課題を与えた。今後の事業ではPYの参加度合を上げるために、他のDGの発表スライドや資料を共有したり参照したりできるプラットフォームを設けると良いかもしれない。

8 海洋環境グループ

ファシリテーター：Ms. Nutch Charoenboon

PY：28名

(1) ディスカッション・トピックの論点

青年のリーダーは、いかにSDGs目標14の理解と、海洋分野の各利害関係者の優先事項を勘案して、人類と海洋の持続可能な関係性を支えるプログラムを設計できるだろうか。

(2) 事前課題

個人課題

- ファシリテーターによる導入動画を視聴すること。
- 自己紹介の設問に答えること。

国別課題

自国における現在の海洋状況について5分間の発表を用意すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- グループ及び個人の目標を立てる。
- 国、ASEAN、そして地球レベルでの現在の海洋状況について理解する。
- 現在も進行する海洋及び生活にまつわる問題と、どのようにSDGs目標14がそれらを軽減できるかを認識する。

活動

- 各自簡潔に自己紹介した後、自分の目標を共有し、本ディスカッションの流れについて学んだ。
- 海洋に関する自国の状況と動きについて共有した。

成果

- PY及びファシリテーターは、DG活動を通じた価値ある経験を生むうえでの各自の役割を認識した。
- 海洋をめぐる現況について理解を深め、ASEAN各国及び日本は似たような特徴を持つことに気づいた。例えば、利用可能な資源、課題、解決に向けた現行の取組などである。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 人による些細で「無害な」行動が、地球環境に多大な影響を及ぼし得ることを認識する。
- 狭い範囲でも何ができるのかについて考え始める。

活動

- 人による些細に思える慣行が知らず知らずのうちに海洋に悪影響を与え得ることを互いに共有した。

- どのように自分たちが#SSEAYP2021SavetheOceanChallenge（SSEAYP2021海を守ろうチャレンジ）という活動を通じて、海洋に対して正の変化を起こし、他の人々に運動への参加を働きかけることができるか話し合った。
- 各国における海洋保護分野の経験（非政府組織やスタートアップ企業など）で得た教訓について検討した。

成果

- 自分たちがいかに海洋や人々に対して悪影響を与えてきたかを振り返り、自らの行動や習慣を変えて、周りの人々にもこの取組に加わるよう働きかけることを決意した。
- 小さな行動が大きな影響を生み出すこと（バタフライ効果）を知り、個人の変化を集団的な行動に転化させることで、より大きな成果を生むことについて考え始めた。その際、各国における海洋及び環境団体の事例が用いられた。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 見本となる団体とそのプロジェクトについて学び、それらのミッション、手法、課題、成功について振り返る。
- いかにポジティブな変化を生み出すか批判的に考え、その変化による波及効果について認識する。

活動

- 海洋保護団体に所属するPY2名が、正の影響を生むための組織運営の経験について話し、ファシリテーターが東南アジアにおける自身のプロジェクトの調査結果について共有した。
- #SSEAYP2021SavetheOceanChallengeの活動を通して得た変化を生み出す経験と、この活動で得られた教訓を将来の取組にどう活かすかについて話し合った。
- 自分たちが聞き取りを行った、もしくは調査した非政府組織の活動について発表し合った。

成果

- 地元で活躍する存在に触発され、また個人・組織の成功や課題に基づく教訓を自分たちのプロジェクトに活かすことができた。
- 各国における事後活動のガイドラインとして用いることが可能な海洋保護プロジェクトを立てた。これらのプロジェクトは当初期待する成果のみではな

く、長期及び短期の影響、そして悪影響までを見据えたものである。また、PYは自らのビジョンについて、成功の測定尺度、資源、取組の持続可能性に至るまで、建設的に考えた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 「上意下達（トップダウン）」な解決策の中で大抵目を向けられていない地元の現実について認識する。自然と人類の双方を考慮している一例として、ゲストスピーカーの組織による活動を知る。
- b. 善意の行動が期せずしてプロジェクトの企図していた正の結果を損なう可能性があることを知り、いかにプロジェクトがそのように陥らないようにするか、発想豊かに考える。

活動

- a. ゲストスピーカー講義
- b. 各国における非政府組織や団体に聞き取りを行ったり調査したりして、海洋保護のアイデアを強化するヒントや有用な人脈を見つけた。また、試行錯誤を通じて取組を推進するのではなく、成功例や課題を「現場」から研究して、それらを状況に合わせて応用できるようにした。
- c. プロジェクトの主軸を、ターゲット層を必ずしも「啓蒙」することにせず、ターゲット層との協力や協働に向ける方法を探った。というのも、知識や認識があっても、行動に移されることはまれであることが実証されているからだ。そして今後のプロジェクト（任意の分野）を形作る練習を行い、一般的に短期になりがちなプロジェクト目標のみならず、長期の成果と予期せぬ結果についても検討した。

成果

- a. 集団での対処を求められる課題に対して、持続可能な変化を生み出す方法についてのアイデアを得た。
- b. 解決策を推し進める際のボトムアップ型のアプローチについて新たな着想を得た。
- c. 現実的な海洋保護計画を立てる中でSDGs目標14に対する青年のリーダーシップに向けての段階を着実に踏み、各々の状況に合わせて最もうまく機能させるべく、互いに助け合ってアイデアを発展させた。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Ryan Lewis（ブルー・ベンチャーズ（英国）エコツーリズム事業開発・マーケティング部技術顧問）※同社は、Save Andaman Network（タイ）及びYAPEKA（インドネシア）と提携している。

トピック：ブルー・ベンチャーズの概要説明

講義から学んだこと

- a. ブルー・ベンチャーズの成功要因は「人間ファースト」の手法を取っていることであり、活動や意思決定の全過程に地元のコミュニティの人々が関わっている。我々のように変革を主導しようとする立場の者は、こうした人々に耳を傾けて、関わりを持ち、その意見や生き方を尊重する必要がある。
- b. 対象地域における既存の組織との提携は、地域に合った形での施策を行うことに役立ち、自身で一から始める場合に比べてより効果的になる。

(4) 成果報告

他のDGのPYと共有すべく、本DGで何を学んだかについて意見を出し合い、トークショー型の動画でその内容を伝えた。DGのメッセージと経験はトピックごとに分類され6名のPYによって発表された。分類トピックは、海洋問題への導入、SDGs目標14、日常生活やその他のSDGs目標と海との繋がり、青年の関わり、影響を被る当事者への考慮と関与である。発表を終え、PYはその結果に満足しているとのことだが、他のDGに比べてあまり質問を受けなかった。DG8のPYは、他のDGのPYが、日常の意思決定の際に海に想いを馳せることはとても簡単であることを理解し、将来にわたって海について考え続けることを期待している。

(5) 自己評価

活動

- a. ファシリテーターは、全員の事前課題から抜粋した「期待すること」のリストを共有し、PYは当初の期待に対して何を得たか振り返ってグループ全体で話し合った。SDGs目標14は他の世界的課題に比べて注目を受けていないことから更に海洋保護へ意識的になったこと、このDGで協働した経験、そして仕事での繋がりも生まれることが予測される新たに築かれた友情などの振り返りが挙げた。
- b. PYの経験を表した一言の例として、以下が挙げた。目が覚めた、視野が広がった、ためになった、対等、ファミリー、効率的、支え合い、意欲的、示唆に富む、ラブ。
- c. 「DG8で学んだ今、今後5年間の海洋との関わりについて」を題材に未来の自分に宛てた手紙を書いた。これらの手紙はパスワード保護されてDGのオンラインクラウド上にアップロードされた。2027年1月9日に、ファシリテーターがDG同窓会を開いてこれらの手紙を参加者に戻し、その時点でのPYの成長や目標について振り返りを行う予定である。

(6) ファシリテーター所感

世界的なパンデミックにもかかわらず、オンラインで

事業を開催できたことが参加者に交流する機会を与え、一緒に頑張る経験をして、関係を築くことができた。一方で、対面で交流する機会がないため、非公式な会合や活動を行って公式のスケジュールを補ったが、これが本番における温かな場づくりに、そしてPYとファシリテーターと一緒に更に効率的に動くうえで役に立った。

PYも、これらの活動が「東南アジア青年の船」青年会議の成功に極めて必要不可欠であった、と言っていることから、こうした活動が公式に認定され、例えば、非公式な活動・追加ワークショップ・カジュアルな会合などにも、適切なガイドラインと財務的支援が提供されると良いと思料する。

9 持続可能なエネルギーの利用グループ

ファシリテーター：Ms. Sitta Marattanachai

PY：30名

(1) ディスカッション・トピックの論点

あらゆる人のためのエネルギーのデジタル化、脱炭素化、分権化を推進するうえで青年はいかに貢献できるか。

(2) 事前課題

国別課題

自国のエネルギー事情の概要を調査すること。これにより、用語、現況、エネルギー問題に関する課題について詳しくなることが期待される。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

現在の国際的、地域的及び地元のエネルギー事情と課題について、PYが理解する一助とする。

活動

- a. 全員による自己紹介
- b. 気候変動及びエネルギー供給に関する現在の国際的な課題について、ファシリテーターが概説した。
- c. 「私の国におけるエネルギー事情概説」と題してPYが4分間の発表を行った。
- d. 8つのグループによる発表の後、意見交換を行った。
- e. Miroというオンライン・ホワイトボード上でファシリテーターが課題を提示した。PYは、自身が興味を持つエネルギー課題は何か、何が発生し、何が引き起こし、誰が影響を受けたのか、について回答した。

成果

- a. 自国でのエネルギー・システムについての知識を得て、分析を行い、他国の例から興味深い結論を導くことができた。
- b. 議論が骨太で、PY同士の話し合いで価値ある示唆を得ることができた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 脱炭素化とは何か、なぜ重要なのか、エネルギー・システムへどのような影響があるかを理解する。
- b. 選択したトピックごとに4つのチームに分かれる。

活動

- a. 温室効果ガスの排出と脱炭素化についての基本を以下2本の動画から学んだ。
 - (a) なぜ我々は脱炭素化に向かっているのか。
 - (b) 炭素の削減はどのように価値を生み出すのか。
- b. デザイン思考の手法（観察・共感、定義、概念化、試作、テスト）にディスカッションの過程が基になっていることや、イノベーションの過程を学んだ。
- c. 持続可能なエネルギーに関する課題を分析するべく、各自の興味関心ごとに4チームに分かれた。
 - (a) よりクリーンなエネルギーへの移行
 - (b) エレクトロモビリティ
 - (c) 再生可能エネルギー技術
 - (d) 脱炭素に関する政策

成果

- a. イノベーションの過程について理解し、温室効果ガスの削減に技術がどのように役立っているかという事例に感心した。
- b. 持続可能なエネルギーの他国における課題について振り返ることができ、脱炭素化したエネルギー・システムの重要性を強調した。
- c. 持続可能なエネルギーに関する課題に対処する技術の活用に興味が増した。

ゲストスピーカー講義

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Danny Kennedy
 （ニュー・エナジー・ネクサス最高エネルギー責任者）
 トピック：気候変動問題に関する行動の未来

講義から学んだこと

- a. 気候変動問題に関する行動の未来及びその背景にある技術。
- b. よりクリーンなエネルギーへの移行がどうして重要で、なぜ我々は持続可能なエネルギー技術を取り入れるよう努力し、より責任あるエネルギー消費者にならなければならないのか。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 持続可能なエネルギーに関する課題に対処するため、デジタル時代におけるエネルギー技術について定義できるようになる。
- b. より広い視野を持って、具体的なエネルギー技術の課題や機会について比較対照する。

活動

- a. ネットワーク作り及び互いを知って友達となるため、PYは無作為にブレイクアウト・ルームに振り分けられた。
- b. 「エネルギー・システムにおけるデジタル化」という動画を視聴して、デジタル・トランスフォーメーションの基本について、また、いかにデジタル技術が将来の持続可能なエネルギーに影響するのかを学んだ。
- c. 小グループに分かれて議論を行った。
- d. 全体では、小グループでの議論や考えについて共有した。

成果

- a. エネルギー課題に対してより持続可能な解決策を開発するため、エネルギー・システムにデジタル技術を組み込むことの機会や課題について議論し示唆を得た。
- b. デジタル技術と自分たちのエネルギー消費の傾向について結び付けて考え、また立場によっては技術へのアクセスが困難な場合もあるということに気づくことができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

エネルギーを取り巻く利害関係者が分散的なエネルギー・システムを用いて持続可能なエネルギーを使用することを後押しするため、PYがこれらの人々について行える支援を考える。

活動

- a. エネルギーの分散化に関する基本及びエネルギー・システムの将来像について学んだ。
- b. エネルギーの分散化についての概念や関連事項の動画を3本視聴した後、エネルギーの課題について小グループで議論した。
 - (a) どのように送電網の不安定さを直すか

- (b) コロナ禍での地方に対して分散化とグリーン・エネルギーが担う極めて重要な役割。
- (c) ブルックリン地区におけるブロックチェーンを用いた送電網（CNBC制作）
- c. 小グループに分かれて「分散化したエネルギー・システムを敷くことによる問題と機会とは」について議論した。
- d. メインルームに戻って、小グループでの議論で学んだことを話し合った。
- e. 本DGの最終課題である2分間ビデオについてファシリテーターが説明した。

成果

- a. 分散化、また、どのように未来の技術が経済成長の機会や脱炭素、エネルギー管理における地域の取組を生み出し得るか、などについて知識を得た。
- b. 全4回のディスカッションから学んだ内容や個人的な成長について、1人1文で振り返りを行った。ほとんどのPYがリーダーシップやディスカッション・スキルの観点で仲間から触発されていた。

(4) 成果報告

重要なエネルギー課題について、以下3点の解決案を発表した。

- a. 電気自動車の範囲の限界、長時間の充電、メンテナンス問題は旧来のエンジンに代わるエレクトロモビリティにとって障害だと議論されてきた。しかし、より環境にやさしく、ガソリンより安価で、内燃機関よりも速い利点がある。
- b. 次世代送電網こそが未来の電力供給の在り方であり、ブロックチェーン技術がその運用管理に用いられ、電力資源のより良い管理のためにはスマート・メーターが使用可能量や使用データを表示してくれる。
- c. 持続可能なエネルギー・システムでは、カーボンオフセットの機会が民間による投資や国際協調を促進する。消費慣行の変化やカーボンフットプリントの削減は、スタートアップや政治家、ASEAN各国及び日本の市民にとって大きな市場である。

(5) 自己評価

各自5分間の振り返りの後、このDGで何を学び、何を得たのかをヘッド・ハンド・ハートモデルを用いて共有した。

(6) ファシリテーター所感

総じて、東南アジア及び日本における現在のエネルギー事情やそれによる課題についてのコミュニケーションや議論は賞賛に値した。なかには当初、持続可能なエネルギーという分野に対するモチベーションに欠ける者

もいたが、各回を通じて、本トピックについて学び、議論することができた。予定通りに全てのディスカッション活動をカバーすることはできなかったのだが、それは

PYに対してよりネットワークと友情を結ぶ時間を割くために内容の簡略化を行ったためである。

第4章 ピア・ラーニングセッション

1 ピア・ラーニングセッション概要

- ・ 全PYは、ピア・ラーニングセッションの各セッションにおいて、オーガナイザーあるいは参加者となる。オーガナイザーとなるのは一人最大1セッションとする。
- ・ ピア・ラーニングセッションは、オーガナイザーがこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等について参加青年と共有し議論する活動として、次のことを目的として実施する。
 - 【オーガナイザー】
 - 自らの考えや経験等を伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること
 - ピア・ラーニングセッションの企画・立案から実施、参加者からのフィードバックまでの一連のプロセスを経験することによりプロジェクトの遂行能力を高めること
 - 【参加者】
 - オーガナイザーの考えや経験等が共有されることでお互いのバックグラウンドをより深く知ることができること
 - オーガナイザーの運営方法からワークショップやディスカッションの効果的な実施方法を学ぶこと
 - 評価及び価値のあるフィードバックができるようになること
- ・ セッションの内容は、オーガナイザーが過去または現在で取り組んでいる研究や活動から得られた経験及び知見のほか、オーガナイザーの自国の活動報告で各国へ発信し共有したいと希望するものとする。
- ・ 事業の趣旨に反するものにならないよう留意し、内容を確認のうえ各国2～3のピア・ラーニングセッションを計画して提出する（合計で、最少22、最多33のピア・ラーニングセッション）。
- ・ オーガナイザーはセッションのテーマ内容について、自らの経験及び知見を共有するに当たり、学術的な内容から日常生活に即した内容まで多角的な視点からアプローチすること。その場合、オーガナイザーはセッション内容を深めるために、テーマ内容に関連する調査及び研究が必要であるが、専門家である必要はない。
- ・ 各セッションは、オーガナイザーが参加者と協力して運営する。
- ・ ピア・ラーニングセッションは、ワークショップ方式、講義方式、ディスカッション方式、その他、セッションのテーマに適した効果的な方法を選択し実施する。
- ・ オーガナイザーは、参加者の好奇心を刺激し、セッションに参加する経験がより良いものとなるように、相互に交流や対話を行うなど、クリエイティブなセッション内容になるよう心掛けて計画すること。
- ・ 活動時間（75分）の内容は、(1) 活動（60分）、(2) 参加者からのフィードバック（15分）とし、「(2) 参加者からのフィードバック」では、参加者からセッションの運営や内容について、主に、オーガナイザーが何を継続し、どういった改善が必要かという観点からフィードバックを受ける。
- ・ オーガナイザー以外の参加者は、当日参加したいピア・ラーニングセッションに自由に参加することができる。
- ・ 参加青年は、セッションI, II, III全ての参加を必須とし、各回終了後のフィードバックアンケートに必ず回答しなくてはならない。

2 ピア・ラーニングセッション一覧

* B:ブルネイ、C:カンボジア、I:インドネシア、J:日本、L:ラオス、Ma:マレーシア、My:ミャンマー、P:フィリピン、S:シンガポール、T:タイ、V:ベトナム

(1) ピア・ラーニングセッションI (令和3年12月5日)

	国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
1	カンボジア	コロナ禍における教育:挑戦、機会、解決	C41, C42, C43, C71, C72, C73, C92	コロナ禍に生じた教育システムの共通する課題を参加者に共有して教育の革新を促し、将来の方向性への良い影響を提起すること	・カンボジアの教育システムの概要説明 (コロナ禍前、及びコロナ禍の教育システム) ・コロナ禍の教育の課題と機会 ・解決策
2	インドネシア	摩訶不思議!あなたをとりこにする独特なインドネシアの伝承	I12, I22, I31, I41, I51, I62, I71, I83, I92	インドネシアの主要な島々をめぐるバーチャルツアーを通じて、インドネシアの文化、料理、観光を参加者に紹介すること	・主催者それぞれが、自身の州の特別、また、独特なものに関しての説明を行う。
3	日本	オノマトペで表現しよう!	J11, J12, J13, J93	ボディランゲージを使ったコミュニケーションの機会を設け、シアター・ゲームやASEAN各国及び日本のオノマトペを紹介することにより、言語の多様性を学ぶこと	・導入 (ミスコミュケーションの体験) ・シアター・ゲーム (表現クイズ、ストーリーテリング) ・オノマトペ・ゲーム (オノマトペ・クイズと表現) ・デイスカッション (独特な表現の例) ・ミスコミュケーションを克服するために、どのような表現を活用できるか
4	ラオス	ラオスへの安全な旅のヒント～観光地、文化、マナー	L62, L63, L81, L91, L93	様々なタイプのラオスの観光 (1. 自然アドベンチャー、2. 文化、歴史、少数民族の生活様式をたどる観光、など) を、コロナ禍においても準備し、紹介すること	・ラオスや観光地についての説明、ラオス北部・中部・南部 (メコン川の宝石) のビデオ上映 ・ラオスにおける「して良いこと、してはいけないこと」と ・問いかけ (ラオスのどこを訪れたいか、またその理由)
5	マレーシア	トラナム織り	Ma33, Ma52, Ma63, Ma82, Ma83	マレーシアのインド文化であるトラナム (縁起物の吊り下げ型の飾り) を紹介し、マレーシアの多民族文化について知ること	・説明 (インド文化、トラナムとは何か) ・実践 (トラナム織りと装飾のワークショップ、縁起の良いトラナム体験を共有)

国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
6	ミャンマー ミャンマーの伝統衣装 (ロンジー)	My11, My12, My13, My31, My62, My63, My71	ミャンマーの伝統衣装 (ロンジー) を知ること。4つの時代におけるロンジーの変化及び人々が文化を大切にしながらどのように変化に対応してきたかを伝えること。自国の文化を尊重していくことは青年の手にかかっていると伝えること。	・説明 ・デイスカッション ・発表
7	フィリピン リーダーシップ・サークル (影響を与える道筋: リーダーシップ促進、アドボカシーの発展)	P93	4つのリーダーシップ・サークル (1. 自分自身のリーダーシップ、2. 他者との間のリーダーシップ、3. コミュニティでのリーダーシップ、4. 社会でのリーダーシップ) を共有すること。これらのリーダーシップ・サークルは、自身の人生の大いなる目的を見つけることに影響し、コミュニティに重要な変化を生み出す。	・参加者の経験に基づくリーダーシップを定義する。 ・4つのリーダーシップ・サークルのデイスカッション (フィリピンの青年育成計画、SDGs、エンパワメントやコミュニティ開発に関連するその他の青年計画などと、個人の経験を関連付けてデイスカッションする。) ・シェアリング
8	シンガポール スタートアップ・エコシステム	S52, S62, S92	シンガポールが活気のあるスタートアップ・エコシステムを構築した要因を、個人、対人、グループ、システム、社会全体のシステムについて体系的に調べる	・個人：青年の起業家への門出 ・対人：ひらめきや他者のサポートが、エコシステムの成功において、いかに重要な構成要素であるか ・グループ：初期のスタートアップのサポート ・システム：資金調達、政策や法令、教育など、国レベルの要因 ・社会全体のシステム：成功したスタートアップは世界的に成長するため、世界規模でスタートアップのインフラや課題を見る必要がある。
9	タイ 持続可能な将来のために責任感をもった消費者になろう	T82	我々の消費行動や具体的な製品について、見落とされ、認知されていない情報を共有すること	・導入 (よく購入するもの、対、日常生活で本当に必要なもの) ・情報共有 (私たちの消費行動の影響) ・デイスカッション (可能な限り最も持続可能な方法で製品を購入するにはどのようなやり方があるか、私たちの欲求を抑えるためにできることは何か)
10	ベトナム ベトナム料理:ヴィーガン (完全菜食主義)	V11, V12, V22, V23, V73, V82, V91	ヴィーガン食を通じてベトナム料理について学び、ベトナムの文化の魅力やヴィーガン食の効能や奥深さへの気づきを得ること	・ベトナム料理の世界の紹介 ・新たな生活スタイルとしてのヴィーガン食 ・ヴィーガンのベトナム料理: ベトナム料理における私たちの提案、ライブ・クッキング・ショー

(2) ピア・ラーニングセッションII (令和3年12月12日)

国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
1 ブルネイ	青年の視点:自覚し、意識して生きる	B33	自覚し、意識して生きる決意を理解すること。各国の成功事例を探ること。未開発のアイデアを掘り下げ、コミュニティで達成するために拡散すること。参加者から自分の経験についてデータ主導の改善を行うこと。	・青年の視点について導入 ・ブレイクアウトルームでのディスカッション (A: 創造産業、B: 青年のエンパワーメント) ・全体共有
2 インドネシア	インドネシア料理の紹介	I13, I21, I32, I42, I52, I63, I73, I82, I91	世界最大の島国であり、多様な文化、言語、伝統があるインドネシアの、特に食における多様性を紹介すること	・インドネシアの紹介 ・インドネシア料理の紹介 ・インドネシア伝統文化の紹介 (インドネシアの人々は普段何を食べているか、どんな栄養があるか、そしてインドネシアの人気料理をどのように作るか)
3 日本	SDGs達成に係る発酵の潜在的可能性の探究	J73, J81, J91	我々の生活スタイルを改善し、環境を守る発酵についての知識を伝えること。ここでは、麹菌に焦点を当てる。ASEAN各国の参加者と麹菌の影響について共有し、食以外にも様々な分野で麹菌の新しい活用方法を発掘する。	・トピックスの紹介、発酵の可能性や麹菌のもつパワーの説明 ・ディスカッション ・「どのように発酵技術と麹菌を使えばSDGsを達成できるか」という重要な質問を主催者から投げかける。 ・アイディアの共有
4 ラオス	マインドセット(ポジティブな考え方)	L43, L53, L71, L73, L92	良い物事の考え方は我々の人生を変える。参加者はセッションを通じ、ポジティブな人間となることを学び、自分がどのくらいポジティブに考えられているかを確認することができる。	・説明 (1. ポジティブな考え方とは何か、2. ポジティブな考え方の良い影響、3. ポジティブ・マインドセットの特徴、4. ポジティブを実践する方法) ・お城テスト (性格テスト)
5 マレーシア	剪纸(中国切り絵)	Ma12, Ma41, Ma42, Ma81, Ma91	マレーシアの中華文化である、剪纸(中国切り絵)を紹介すること。加えて、マレーシアの文化の多様性について取り上げる。	・説明 (中国の剪纸(中国切り絵)とは何か、剪纸デザインの種類) ・実践: 剪纸を作り装飾するワークショップ ・剪纸の作成体験からの感想共有
6 フィリピン	草の根のレンズ写真を通じて地域の意思決定プロセスにおけるコミュニティの力を高める	P11	コミュニティ運営において住民の意義ある参加を促すための、参加型のツールである、フォトボイスという手法を紹介すること	・フォトボイスについて説明 (なぜ写真なのか、フォトボイスのねらい、地域開発で使用されるフォトボイスの事例、実際のプロジェクトにおけるコミュニティからの成果事例) ・ディスカッション

国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
7 シンガポール	ようこそ、我が家へ	S13, S21, S33, S91	シンガポールの食と住を通じて、シンガポールのリアルな体験を参加者と共有すること。シンガポールの公営住宅の概要について学び、それが民族と文化の関係にどれほど影響があるのか理解を深めること。シンガポールの食、コーヒー、お茶文化について知ること。	・シンガポールの都市計画I(シンガポールの公営住宅HDBとは、都市計画の理由、近隣の様々な建造物) ・シンガポールの都市計画II(様々なニーズを満たす施設、遊び場、子供の遊び) ・あなたの飲み物ゲーム (Kopi-C (砂糖と練乳を入れたコーヒー)、など) ・料理や飲み物の紹介 ・近隣住民との関係性
8 タイ	感情を自由に:自分自身を解放し人生を変化させよう	T11, T12, T13, T23, T61, T63, T83	パンデミックの最中に、感情に気づく力を高めること。自尊心や明確な考え方、ポジティブな感情、そしてより平和的な感覚を研ぎ澄ますこと。感情コントロールのツールや技術を提供すること。	・感情のホイールをチェックし、今の自分の感情を認識し、自分の感情に対して何ができるのかを考える。 ・感情を自由にする技術、タッピング
9 ベトナム	あなたはいつ結婚しますか	V32, V41, V72, V81, V83	愛や結婚に関する課題を定義して直面し、それらを解決して、実際の生活にあてはめ、評価、分析、予想し、セクシャリティや家族、人権などについて他の価値や側面に関連づけるための基礎を形成すること	・結婚の決定に影響を与える要因を連想する歌に挑戦 ・ディスカッション (結婚前及び結婚後の過程・考え方に影響を与える要因や要素) ・モン族の「誘拐婚」の慣習や、ベトナムの「運命の赤い糸」の考え方を紹介

(3) ピア・ラーニングセッションIII (令和3年12月19日)

	国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
1	ブルネイ	ロックダウンによるバーンアウト(燃え尽き症候群)を避ける方法	B41, B42, B44	ロックダウン中の心の健康の重要性、また、ロックダウンで直面する状況や困難に打ち勝つための戦略を理解すること	・導入(ロックダウン中のセルフケアの実践方法、バーンアウト(燃え尽き症候群)とその兆候) ・実践(動画をを用いて、ヨガなどのセルフケアを実践) ・共有(ロックダウンで経験したストレスや不安にどのように対処したかについて参加者間で共有)
2	カンボジア	カンボジアのLGBT: LGBTに対するドメスティック・バイオレンス(DV)	C13, C22, C51, C52, C62	LGBTへのドメスティック・バイオレンス(DV)が今もおお広範囲に行われ、特にカンボジアなどの開発途上国において、未解決であるという懸念を提起すること。LGBTに対する差別は、個人の問題だけでなく社会問題であるという気づきを広げること。社会的弱者としての全てのLGBTの声となること。	・投票や質問によるLGBT導入 ・カンボジアのLGBTに関する発表(カンボジアにおけるLGBTに対するDVの現状と概要、文献考察及び専門用語についての説明、カンボジアにおけるLGBTの権利、DV解決のための重要な課題やその種類、ケーススタディ) ・参加者から各国のLGBTの状況を共有
3	インドネシア	インドネシアの伝統スバ体験(若々しく、健康でいるために)	I11, I33, I43, I61, I72, I81, I93	シンブルな動きで健康的な肌へと導き、伝統的な方法を用いて疲労した体をリラクセスし、エネルギー回復に役立つ、インドネシアの伝統的なスバを紹介して、その知識を得ること	・導入: フェイシャル・マッサージやエッセンシャル・オイルなど、インドネシアのスバの紹介 ・スバの実践: フェイシャル・マッサージとフット・スバ ・まとめ: スバの効能、特にフェイシャル・マッサージやエッセンシャル・オイルの使用について
4	日本	バーチャルJAPANツアー: 伝統文化の可能性を求めて	J21, J31, J32, J63	日本の文化をASEAN各国からの参加者に紹介すること。各国の独自文化や伝統をどのように保全していくかをディスカッションすること。	・発表(日本文化探検): 食、芸能、銭湯、祭 ・ディスカッション: 伝統文化の後継者不足を解決するための最善な方法は何か
5	ラオス	今こそ、気づく、ケアする、共有する	L11, L31, L42, L61, L72	「気づく、ケアする、共有する」。コロナ禍で、多くの人々がクオーターライフ(人生の4分の1)・クラインスで勉学や仕事に悩んだり、社会的孤立や財政不安などの困難に直面したりしている。これらは、バーンアウト(燃え尽き症候群)やブラウンアウト、うつなどの心の健康の問題を引き起こす。それゆえ、自分の精神状態に気を配ることが必要不可欠である。	・心の健康の定義 ・心の不調をもたらす根本的な原因 ・パンデミック時の心の健康 ・問いかけ: 悪い状況を乗り越えるための自分のストレス対処戦略は何か ・ストレス対処戦略 ・アクティビティ・リスニング ・瞑想

国	セッションの題名	主催者*	セッションの目標	活動
6 ミャンマー	ミャンマーにおける教育水準と雇用機会の関係性	My41, My42, My43	ミャンマーの若者にとって、雇用機会に教育が与える影響を理解すること。ミャンマーの若者が様々な分野で自分のキャリアをいかにして見つけていくか、また、国全体の発展のために、参加者それぞれの国で教育水準がどれほど重要なのかを学ぶこと。	・テーマに関する発表 ・ディスカッション (1. 良い職を得るために質の高い教育を得ることがいかに大切か、2. 高い教育を受けていない人々のために、どのような職の機会を生み出すことができるか、3. 高校や大学は、就職に向けて学生が準備するために何ができるか)
7 フィリピン	ボーカル・ダイナミクス: 声の高さ、速度、大きさ、ボイス・テクニク	P81	参加者が人前で話すことに対する恐怖や不安を最小限にし、話し方や声の出し方のコツを学び、実践すること	・実践 (イントネーション、感情) ・ディスカッション (1. 対面コミュニケーション、対、非対面コミュニケーション、2. 統計、3. 声を運ぶ) ・重要なポイントの共有
8 シンガポール	スマート国家シンガポールの人工知能(AI)に人間味をもたせよう	S12, S23, S42, S53, S93	スマート国家やAIに関するシンガポールの知識や経験を共有すること。双方向のテクノロジー・ツールを使用し、ワークショップや講義、ディスカッションにおける効果的かつ魅力的な方法を共有すること。参加者の国におけるスマートシティの経験や知識から、あらゆる層の人々がデジタル化に対応できるようなイニシアチブを学ぶこと。	・スマート国家の包括性や、適切なペースで進歩していることに着目していることを強調 ・アプリなどの実例 ・データ・プライバシーに関するディスカッション
9 タイ	MUTELU:スピリチュアリティ(精神性)が促進する地域の経済ツーリズム	T22, T31, T32, T33, T42, T51, T52, T53, T62, T71, T81, T93	「スピリチュアルな経済ツーリズム」を、ASEAN各国と日本における地域経済を強くするための概念として活用すること。ASEAN各国と日本における観光地を含めた観光ルートマップを共同作成すること。ASEAN各国と日本の文化の多様性を発掘すること。自国にある信仰を再確認すること。	・ブレイクアウトルーム・セッション (参加者を3つのグループに分け、異なるトピックでディスカッションし、スピリチュアル・ルートマップを作成する) ・共有 (スピリチュアルな観光ルートマップ作成のためのブレインストーミング)
10 ベトナム	ヴァイゲーム	V11, V13, V21, V22, V31, V33, V51, V53, V62, V71, V73, V82, V91, V92	ベトナムの伝統的なゲームを紹介し、日本やASEAN各国の文化との類似性を紹介すること。デジタル文化の時代に、ベトナムの伝統的なゲームを通じて、遊びの文化を保護し、促進すること。	・アイスブレイクゲームの紹介 ・ロト・ゲームの紹介と実演

第5章 参加青年による事業評価

参加者に対して事業終了時に事業評価アンケートを実施した。集計結果は次の通り。

注：対象は、参加青年270名。

値は小数第一位で四捨五入されている。

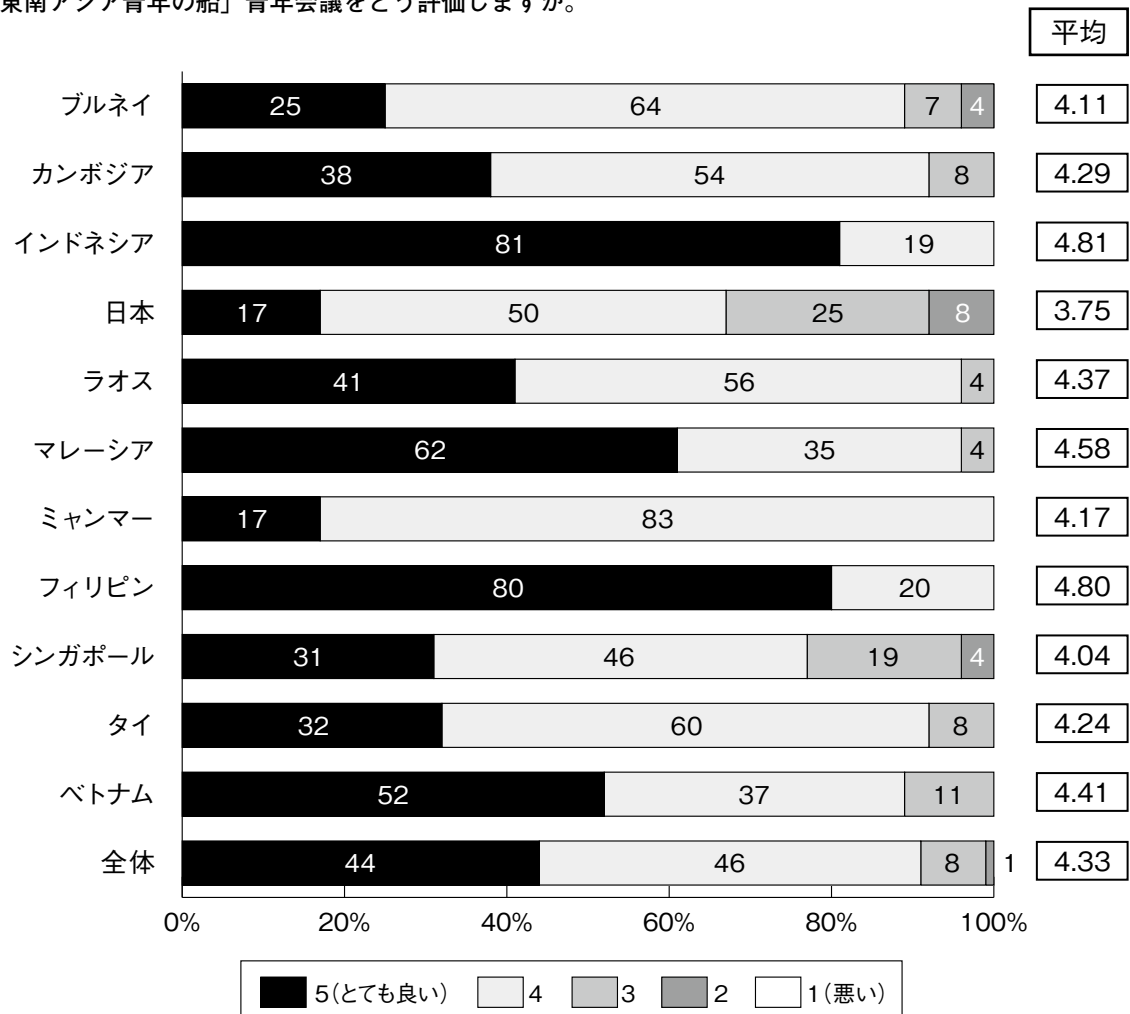
統計処理上、合計が100%にならないことがある。

1 事業全体

事業全体に関しては、全体平均は4.33で、90%の参加者が4以上（良い）と評価した。この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、両方の問いに94%が4以上（思う）と評価した。また、

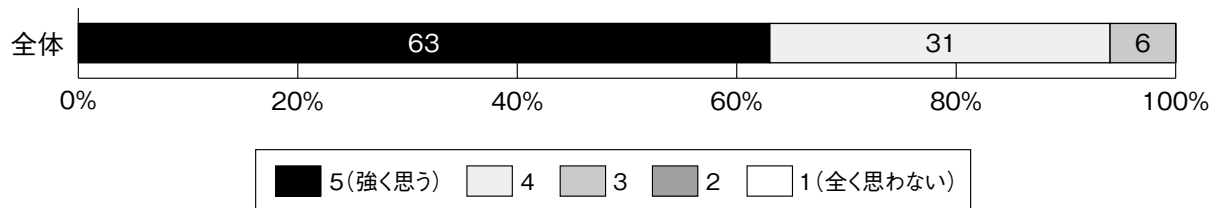
この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対し、「集団への適応力（協調性と柔軟性）」、「責任感」及び「ディスカッション力」に関して、85～87%の参加者が4以上（大きな効果がある）の評価をした。

Q. 「東南アジア青年の船」青年会議をどう評価しますか。



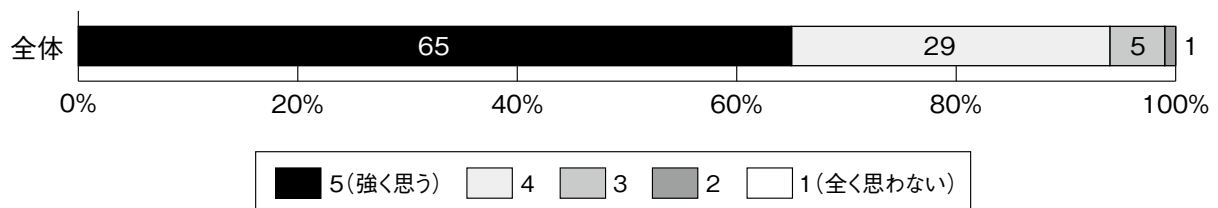
Q. この事業が、あなたと各国の人々との相互理解を促進することには貢献していると思いますか。

平均: 4.57



Q. この事業が、あなたと各国の人々との友情を築くことには貢献していると思いますか。

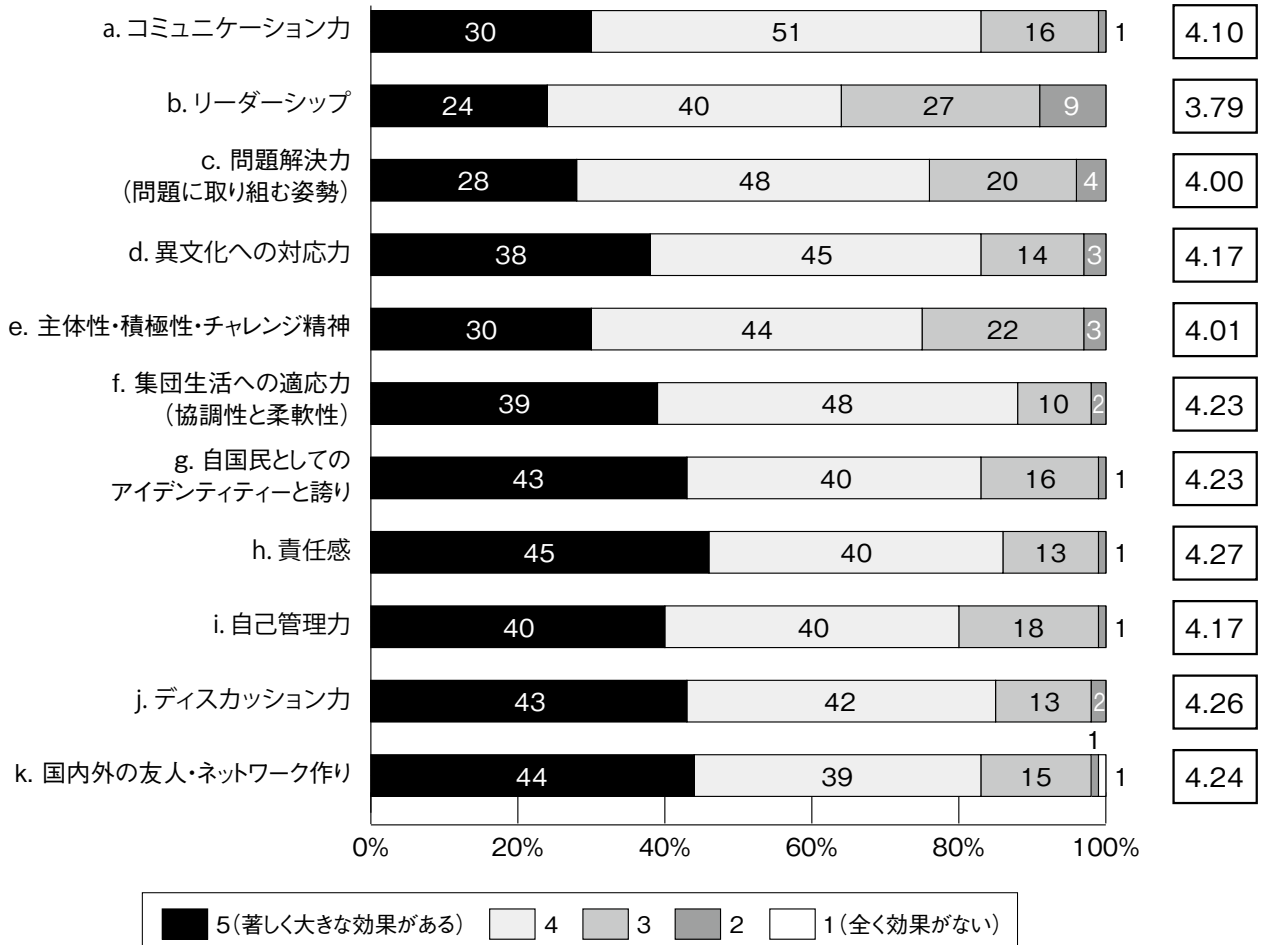
平均: 4.58



Q. この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えますか。

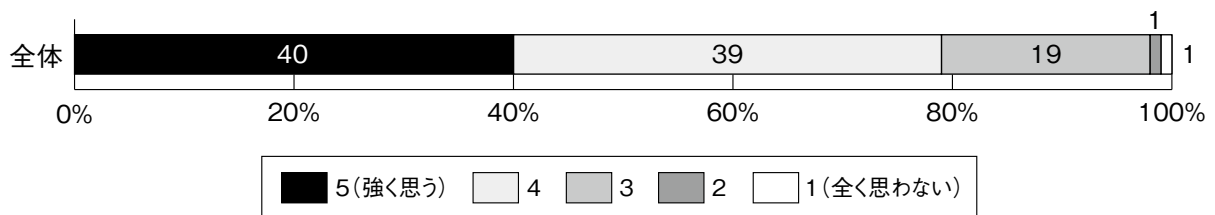
それぞれの項目について回答してください。

平均



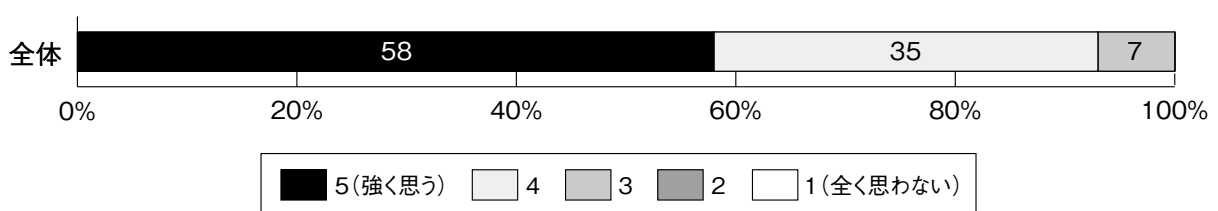
Q. この事業への参加は、あなたのキャリア（職業）における将来性を高めると思いますか。

平均: 4.16



Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めると思いますか。

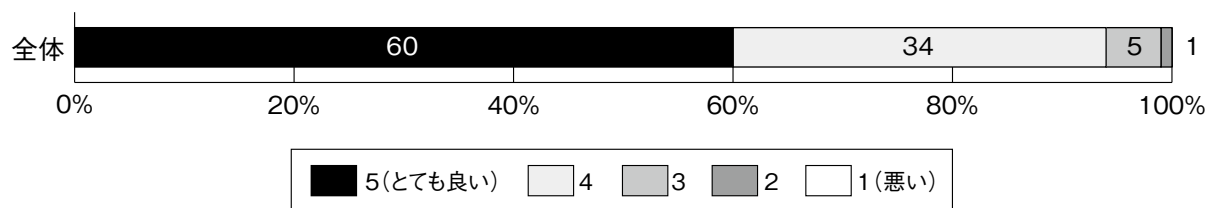
平均: 4.49



2 基調講演

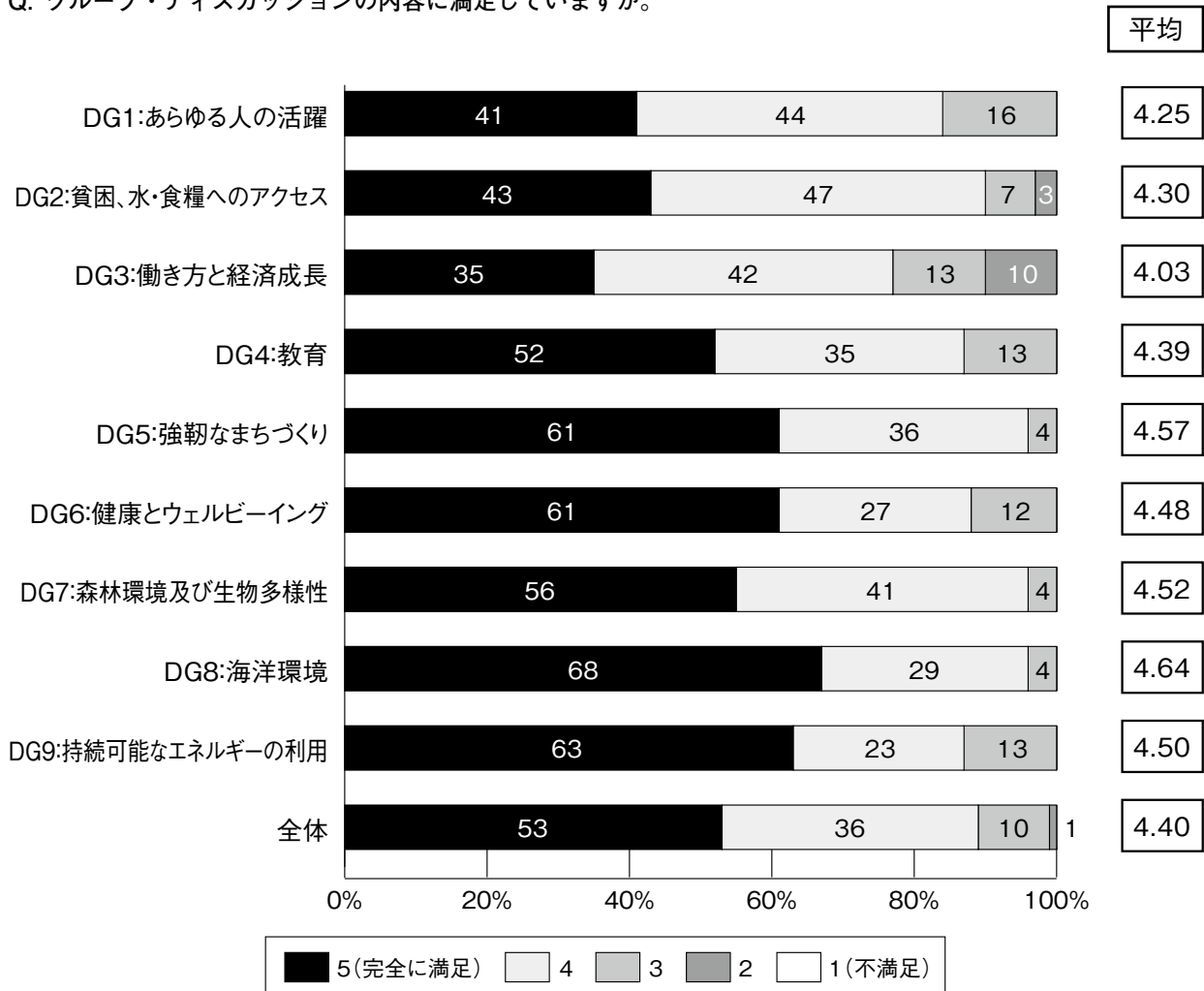
Q. 11月28日の基調講演（辰野まどか氏）はどうでしたか。

平均: 4.54

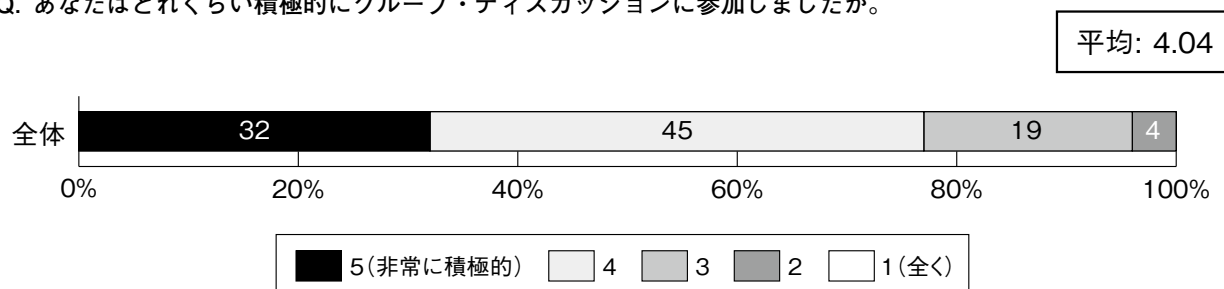


3 グループ・ディスカッション

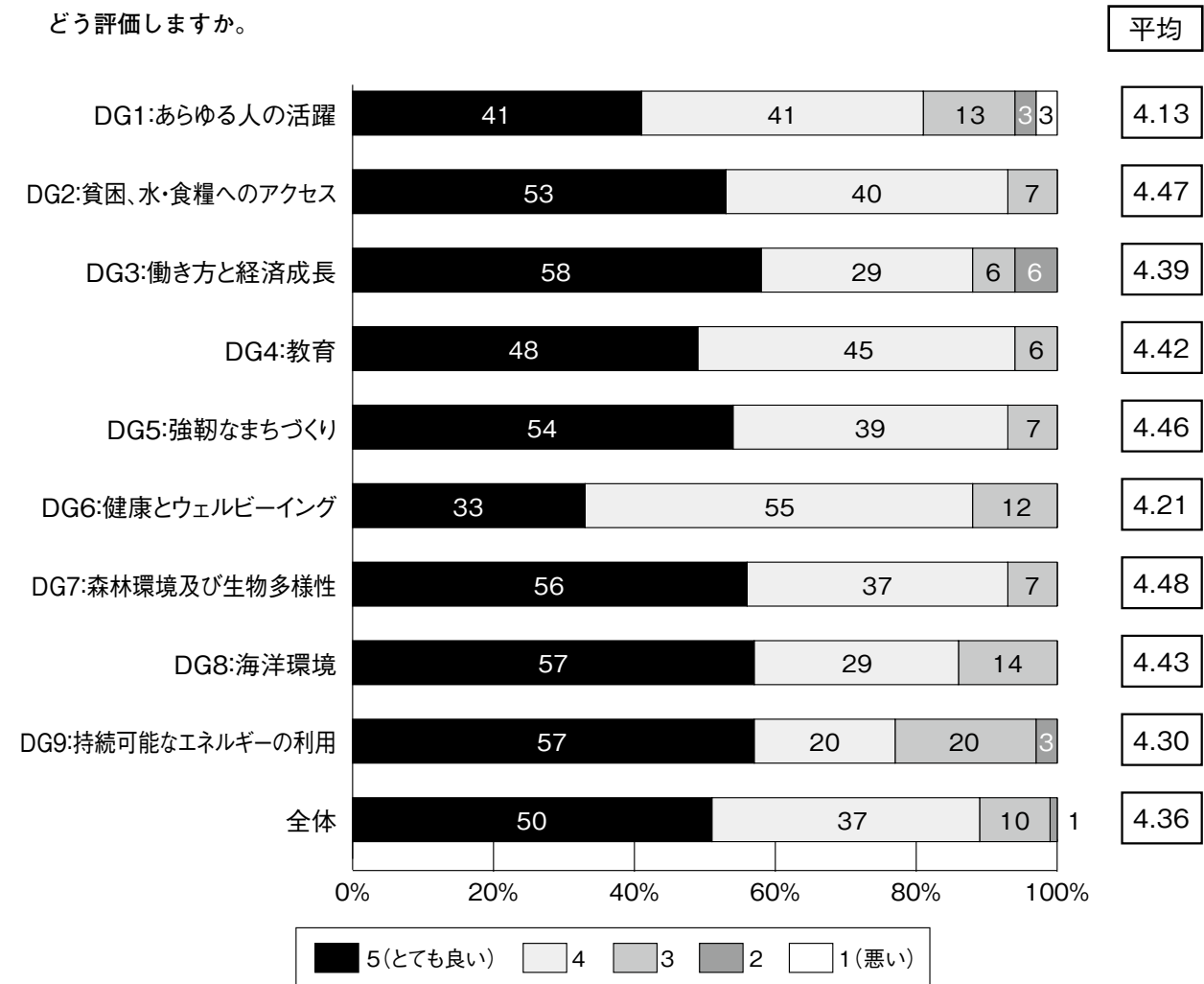
Q. グループ・ディスカッションの内容に満足していますか。



Q. あなたはどれくらい積極的にグループ・ディスカッションに参加しましたか。

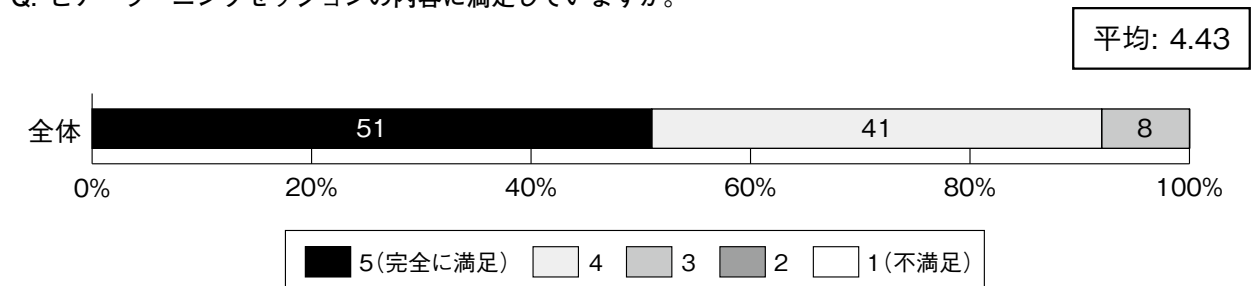


Q. ディスカッションのグループ・トピックとの関連において、ゲストスピーカー講義を
どう評価しますか。



4 ピア・ラーニングセッション

Q. ピア・ラーニングセッションの内容に満足していますか。



2 参加青年の構成

(1) 国別・年齢別参加青年数

国名	年齢 性別	18～19歳		20～24歳		25～30歳		計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
ブルネイ		1	2	7	7	5	6	13	15
カンボジア		2	1	8	8	2	3	12	12
インドネシア		0	2	7	11	6	0	13	13
日本		1	5	2	9	2	5	5	19
ラオス		1	3	8	8	3	4	12	15
マレーシア		3	3	8	8	1	3	12	14
ミャンマー		0	1	1	1	1	8	2	10
フィリピン		2	2	8	6	4	3	14	11
シンガポール		1	1	6	6	4	8	11	15
タイ		1	2	3	10	5	4	9	16
ベトナム		0	6	4	10	4	3	8	19
計		12	28	62	84	37	47	111	159
(注) 令和3年4月1日現在						合計		270	

(2) 国別・職業別参加青年数

国名	職業 性別	公務員		会社員		NGO/NPO		自営		教員		学生		その他		計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
ブルネイ		2	1	6	2	0	0	2	0	1	1	1	10	1	1	13	15
カンボジア		0	1	1	1	2	1	1	0	0	1	8	8	0	0	12	12
インドネシア		2	1	3	3	4	0	0	1	2	3	2	5	0	0	13	13
日本		0	2	0	4	1	0	0	0	0	0	4	13	0	0	5	19
ラオス		0	1	3	2	4	1	0	0	0	2	5	8	0	1	12	15
マレーシア		0	0	2	3	0	1	0	1	0	1	10	8	0	0	12	14
ミャンマー		0	1	0	0	0	0	0	0	1	6	1	3	0	0	2	10
フィリピン		3	3	1	2	1	1	0	0	2	0	7	5	0	0	14	11
シンガポール		2	6	0	1	1	1	0	1	0	1	7	5	1	0	11	15
タイ		1	2	1	2	1	1	0	0	0	0	6	11	0	0	9	16
ベトナム		2	1	3	2	1	1	0	0	1	2	1	13	0	0	8	19
計		12	19	20	22	15	7	3	3	7	17	52	89	2	2	111	159
(注) 令和4年1月9日現在														合計		270	

内閣府青年国際交流事業報告書2021

令和3年度

「東南アジア青年の船」青年会議

発 行 内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町 1-6-1

TEL: 03-6257-1432

FAX: 03-3581-1609

URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

編 集 一般財団法人青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町 2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL: 03-3249-0767

FAX: 03-3639-2436

URL: <http://www.centerye.org/>

編集協力 日本青年国際交流機構

URL: <http://www.iyeo.or.jp/>

内閣府青年国際交流事業報告書2021

令和3年度「東南アジア青年の船」青年会議